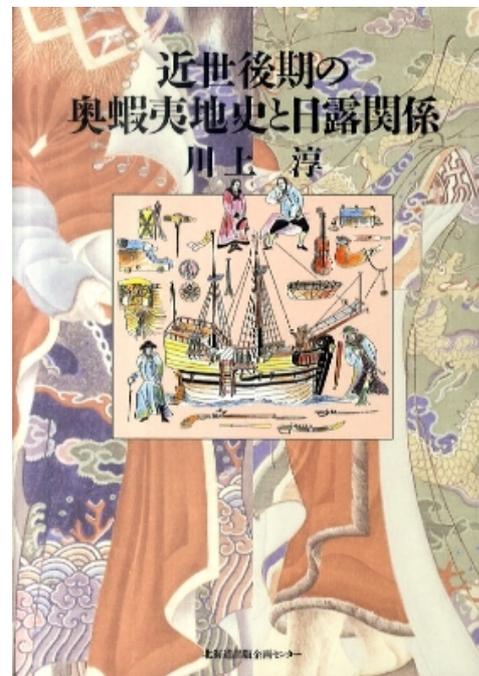
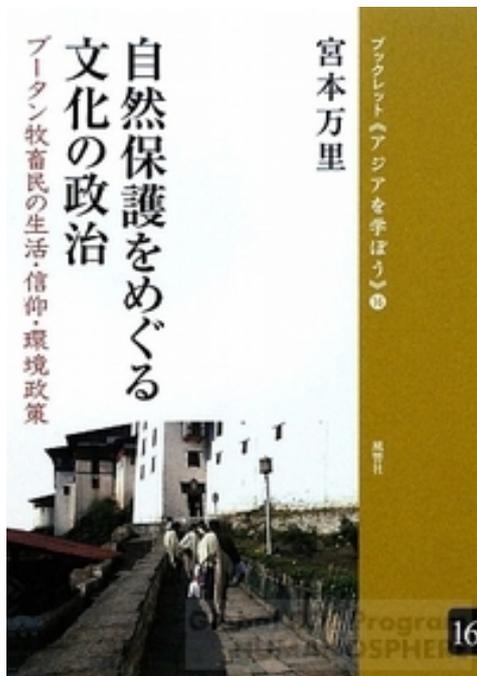




特集「ボーダースタディーズ・セミナー2011」

- 現代ブータンの自画像 2 頁
宮本万里(GCOE「境界研究の拠点形成」研究員)
- 近世後期の奥蝦夷地史と日露関係を考える 25 頁
川上淳 (札幌大学文学部教授)





現代ブータンの自画像

日時 2010年12月8日(水)、16:30-18:00、北大スラブ研究センター4階大会議室

報告者 宮本万里(GCOE「境界研究の拠点形成」研究員)

(司会) GCOEのボーダースタディーズ・セミナーは、基本的に北大内の方にとずっとやっていただいていたのですが、そろそろセンター内研究員の方にお願しようと思ひ、宮本万里さんをお願いしました。宮本さんは、2008年度日本南アジア学会賞を取られています。今日の報告ですが、これは何回かすでに現地調査をされた上での貴重な現地の報告だと私は認識しております。

(宮本) 皆さん、こんばんは。寒い中をお越しいただきましてありがとうございます。ここはスラブ地域の研究をしている方が主なのですが、私はちょっと分野違いの南アジア研究という領域から来ています。今日お話しするのはブータンという国です。

はじめに

ブータン研究というのは、南アジア地域研究の中でも非常にマイノリティーで、ブータンはこれまでほとんど研究がなされてきませんでした。恐らく、この国の政府が外国人研究者の受け入れをあまり認めてこなかったということも、その原因の一つとして挙げられるでしょう。

今回の発表ですが、私は基本的に文化人類学を専攻していますので、地域社会に入って参与観察をし、そこに暮らす人々へのインタビュー等を通して、地域の現状を分析していくという手法を主にとっているわけですが、今回の発表ではもう少しだけ大きな話ということで、ブータン政府が現在の国民国家をつくっていく中で、どのようにして現在世界的によく知られているような国民像あるいは国民の文化的自画像をつくりあげてきたのかということに焦点を当てて発表させていただきたいと思ひます。

現代ブータンへのまなざし

まず現代ブータンということですが、この地域というのは、一般に欧米諸国や国際社会の人々から興味をもってさまざまに描き出されてきた地域であったといえます。先ほど述べたような研究状況もあり、やはり国内の状況がよく分からないという中で、さまざまな形で神秘化されたり、理想化されたりという、そういうことがしばしばおこってきたわけです。

その神秘化の方法の1つとしては、「最後のチベット仏教王国」という表現があります。ブータンの位置するヒマラヤ地域の他のすべての仏教国も、ダライ・ラマが率いるチベット政府もみな、中国やインドの侵略・干渉によって独立した地位を維持することができなかったわけですが、ブータンはそうしたなか、世界で唯一の独立したチベット仏教国として残されたことによって、チベット仏教研究者をはじめ様々な立場から注目されてきました。

また、もう1つよく言われることは、開発よりも地域の生態環境を非常に大切にしている国だということでした。特にブータンはヒマラヤ山脈の南斜面に位置することから、南北の標高差も7,000メートルほどになります。そうした中で豊かな生態環境が育まれた生物多様性保存のための適地として注目されていますが、それに先駆けて政府自身が自らを環境保護国家として位置付け、国外に向けてアピールして



きたことで、ブータンはこれまでに環境先進国としても国際的によく知られるようになったといえます。

さらにもう1つ。近年日本でもしばしば取り上げられるようになってはいますが、「幸福大国」というイメージがあります。これは、政府と国王が国民総幸福度（GNH：グロス・ナショナル・ハピネス）というオルタナティブな開発理念を提唱したことに起因します。この概念は、いわゆるGNPやGDPに代表されるような物質的な価値だけではなく、伝統文化や精神的価値をより重視していくことが大切だとする理念です。ブータン国王が提唱したこの開発理念は、近年の非常に行き詰まった世界的な経済不況の中で大きな注目を集めており、先進諸国を中心に多くの研究者や政府関係者がGNHに関するセミナーを各国で開催するなどしてきました。そのために、実際にはブータン社会の実体が不明なまま、このGNHという概念だけが、浮遊しているといえますか、注目を集めてしまっているという状況もみてとれます。

しかしながら、こうしたいわばポジティブなイメージ群の一方、他方ではこの国は80年代末から90年代初頭にかけていわゆる異民族排他的な政策をとって、南部に居住するネパール系住民を難民化させたということが知られています。これは今となっては20年もたってしまいましたので、あまり表ざたに知られることが少なくなっているのですが、それでもブータン社会を語る中で、欠かせない傷跡として残っているという状況があります。この問題の起こった90年代初頭には、こうした排他的な政策が国際的に大きな非難を受けましたので、それによってブータンは「人権意識の低い専制国家」としても同定されてきたわけです。

皆さんにとってあまり親しみのない国でもあり、少し印象的な部分で一般にブータンがどういうイメージを持たれているかということをご紹介しましたが、今回の私の発表もこうしたいわゆる文化的自画像がどのようにつくられてきたのかという点を考えることが、1つのテーマとなっています。

そしてもう1つのテーマは、2007年から非常に積極的に進められている民主化プロセスについてです。2007年に上院議員選挙、2008年に下院議員の選挙と、ブータンでは初めて普通選挙制度のもとでの国政選挙が実施され、今ブータンは政治的には大きな変革期にあると言えるのですが、そうした状況の中で、ブータンの国家と社会がこれまで築いてきた文化的自画像、仏教やその他の文化的な資源によってつくられてきた文化的自画像が、はたしてどのように変わりつつあるのかという展望みたいなものを、少し述べられればと思います。

ここで少し写真をお見せしながらお話ししたいと思うのですが、これまで述べましたように、ブータンは仏教というものが非常に深く根付いた国であります（写真①）。



(写真①)



(写真②)

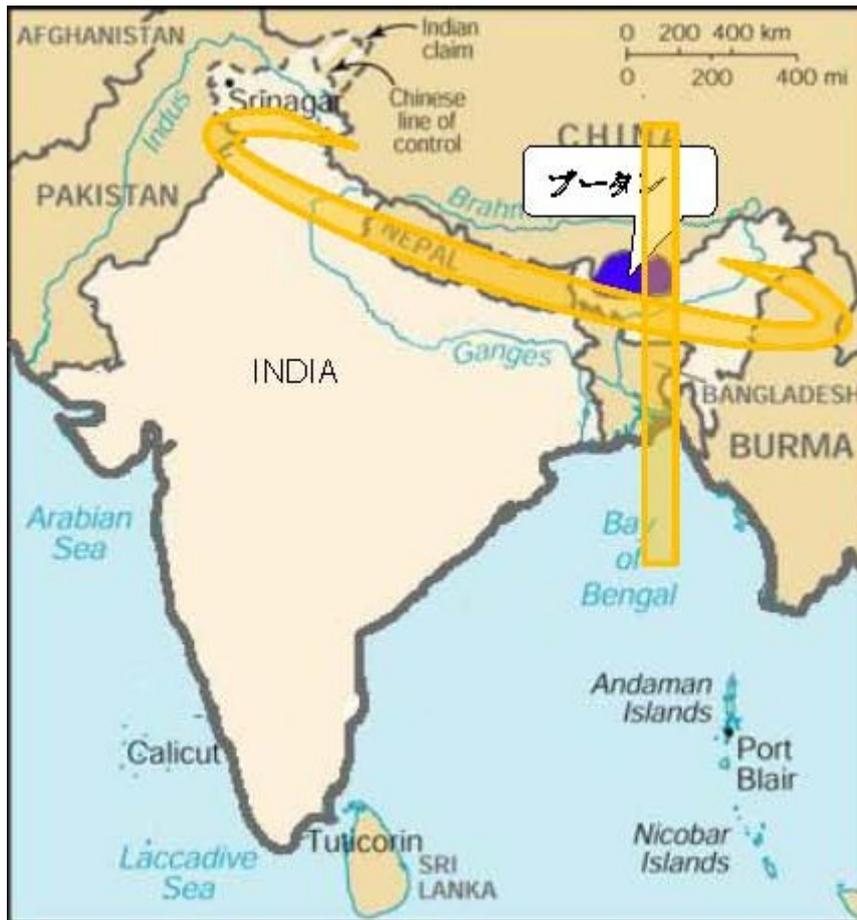
そして地図をみますと、まず九州ほどの大きさの土地に、東西に走る自動車用の国道が一本のみという状況で、国土を東西に縦断するその国道から、南側に向けて国道が数本楯のように伸びています。この南へ抜ける道路がインドにつながる道となっています。このように、ブータンは車で走っても西の端から東の端まで3日以上かかるという形で非常にアクセスが悪いので、今でもまだツーリストが行けないような場所というものたくさんあります。こちらの写真に出ている人たちは、トゥムシンラ国立公園というブータンの中央部にある公園のパークレンジャー達ですが、先ほど述べましたように、こうした環境保護活動というのは非常に積極的に行われています(写真②)。また、幸福大国というイメージについて補足しますと、これは2005年に全国一律で一斉に行われた人口調査で幸せ度に関する項目が設けられ、そこで「あなたは今幸福か」という問いに対し、(その段階には、とっても幸福である、まあまあ幸福、そうでもないなど、5段階)「まあまあ幸福」以上の人がほぼ90%以上いたということに起因します。この数字は、最近になってグロス・ナショナル・ハピネスの概念が国際的に取り上げられるときにしばしば取り上げられており、これらをとおしてブータンが「幸福大国」と呼ばれるようになったといっているでしょう。実はこの2005年の人口調査のときに私は1年間調査でブータンに滞在をしております、私自身も人口調査の対象になったのですが、この時、ブータンの研究機関との5年間近い交渉の結果ようやくビザがもらえて滞在し始めたときであったので、「非常に幸福である」と答えた記憶があります。それも恐らくこの結果に入っていると思います。

ブータンの政治・文化・地理状況

話が前後しますが、ここでもう少しブータンの政治、文化、地理状況というものをお話ししたいと思います。まず東西方向でとらえたとき、ブータンはいわゆる南アジア地域と東南アジア地域の境界域に



位置していると言えます。南アジアといいますと、まずはインドが非常に注目を集めるわけですが、それに加えてイスラム諸国であるパキスタンとバングラデシュ、そして仏教国であるスリランカ、ネパールと徐々に知名度が上がっていく感じなのですが、ブータンは、地理的にも、知名度からいってもその周縁に位置しているといっていいいでしょう。しかし、このように地理的に見て南アジア地域の辺境に位置しているということは、つまり東南アジア地域へのフロンティア・入口でもあるということです。



そしてもう1点はチベット仏教世界、地図上ではこの枠から北側、つまり上部がチベットですが、ブータンはこのチベット仏教世界とインドヒンドゥー世界およびイスラム世界との狭間に位置する地域であり、その文化・宗教的な境界地域でもあったわけです。

ブータンは九州ほどの国土面積で、総人口は在外人口を含めても70万に満たないという、規模としては非常に小さな国ですが、それでありながらこうした地政学的な状況の中で独立国として国連に加盟を果たし、今まで生き延びてきたというところにこの国の面白みがあるかなと思います。といいますのも、例えば、以前このネパールとブータンの間にはシッキムという仏教王国があったのですが、この国も1974年にはインドの一州として併合されていますし、ネパールのさらに西側にあったラダックという王国もだいぶ前にインドの一部に入っています。このような隣国の例をみても、中国とインドという二つの地域大国に挟まれた境界地域にありながら独立国でいつづけるためには、非常に難しい対応が求められてきたことが分かるわけです。



これは「Google マップ」から取った地図ですが、ネパールやブータンの上部にインド亜大陸がぶつかってできたヒマラヤの大山脈が連なっており、それが北部の地理的な境界になっている様子がよく見えるのではないかと思います。



ブータンの北部は、そうした 7,000 メートル峰からなる山脈、大ヒマラヤ連邦によって人の侵入がいわば妨げられ、そして南部は古くはマラリアのはびこる深い亜熱帯林が外部者の侵入を防いできたわけです。とはいえ、実際にはチベットとの交易は古くから盛んであり、その関係は 1950 年代末まで維持されてきました。

宗教・政治体制

ここでさらに宗教、政治体制について少し説明をしたいと思います。この国の統治体制は 17 世紀に初めてチベット仏教のカギユ派のドゥック派の座主、つまり宗派の長であったンガワン・ナムギャルが、チベットの国内での政争に敗れてブータンに政治亡命をしてきたことに端を発しています。つまり、ンガワン・ナムゲルがブータン国内のドゥック派の寺を基盤として、初めてブータンの現在の領土（に近い領土を）を政治的に統一したのが、政治的単位としてのブータンはじまりだといえるでしょう。

彼自身がシャブドゥンつまり聖俗両界の長として位置し、彼の下に宗教界の長と俗界の長を従える 2 頭体制を構築しまして、これを「チョシ制度」と名付けました。この制度というのは、ダライ・ラマを聖俗の長とするよく知られるゲルク派の制度に非常によく似たものでした。しかし、この制度は、初代シャブドゥンのカリスマに大きく依存していたため、シャブドゥン逝去後の制度の維持が難しいという問題がありました。初代シャブドゥン死後、転生制度を導入することによって制度はかろうじて維持されてきたものの、国内では徐々に地方の貴族や地方領主たちが台頭し、そのうち主に二つの地域の支配者たちが国権をめぐる熾烈な競争を繰り広げるようになっていきます。

そうしたなか、一方の地域の支配者であった現在のワンチュク王家の始祖が、英領インドの支持を得て、ワンチュク家を打ち立て、国内の敵対勢力を制圧して王制を打ち立てました。その時期はまだイ



ンドもイギリス領だったわけですが、ブータンはイギリス領となることなく、逆にイギリスの一定の支持をえるなかで独立国家として構成されたわけです。この世襲君主制というのは現在まで続いていて、2008年には100周年を迎えています。王制としては、そこまで深い歴史があるとは言えませんが、それでも何とか100年続いてきたというところですね。

このようにシャブドゥン制度の2頭のうち、世俗の長が国王によって担われた中で、宗教界の長、つまり大僧正による宗教界の統治は継続しています。ワンチュク家の世襲君主制開始後も、公には宗教界と世俗界の長は同等の位置にあると説明されてきました。国王と大僧正の2人が肩を組んで笑っている写真というのが、ブータン国内にはそこら中にまかれていたが壁に張ってあるのですが、ちょっと写真を撮るのを忘れておりました。今日はお見せできず申し訳ありません。

そして2008年には、先ほど言いましたワンチュク王制100年を機に、これまでその厳格さや先見の明において国民から多くの尊敬を集め、近代化の父と呼ばれていた第4代国王が自ら退位しまして、若い第5代国王に代替わりを果たしています。これまではもちろん前の国王が亡くなることで世襲されてきたのですが、第4代国王に限っては、父王の死によって17歳で戴冠し、1973年から統治をしていますので、もうだいぶ長いですし、ブータンの変化を促すためにも、自ら退位する形で進めていこうということで、惜しまれつつ退位をしたわけです。そして長男である皇太子が王位を継ぎました。そして同時に普通選挙制度の導入、憲法制定を行うなかで、ブータン政府いわく民主立憲君主制へ移行していったわけです。

それでは宗教界というものは、この際にどう位置付けられたのかというのが今日の1つの問いです。ちなみにこの第5代国王は非常に若者というか、若い女の子に人気があります。タイへはブータンから毎日飛行機が飛んでいるのですが、私はブータンへの道中、タイで第5代国王のファンクラブができていたのを発見し、かなり驚いたのですが、非常に人気があるということですね。

地理的状況ですが、先ほどもちょっと言いましたが、ブータンはやはり地理的に南北の標高差に加え、北部から流れる河川によって国土が細かく分断されていますので、それが文化、社会状況に非常に大きな影響を及ぼしていますが、その中の1つ大きなものがブータンの中央部の南北にあるブラック・マウンテン・レンジです。この山脈によってブータンの国内はどう文化的に編成されてきたのでしょうか。

言語状況についてですけれども、ゾンカというのはブータンの国語ですが、それが西側の地域の人々、つまり主にチベットからもともと入ってきたといわれる人たちによって話されているのに対し、ビルマ系の人々が多いといわれる東の地域では、ブラックマウンテンを挟んで谷ごとに言葉が違うといわれるほど言語的な多様性が大きいのです。クルトェカ、ブロックカト、ザラカ、ブムタンカ、チョチャガチャカー、ダクパカ、ブロックパケ、チャリカ、ツァンラ、ゴンドゥク、ケンカ、ニャンカ、ラカ、オレカなど、11以上の異なる言語集団があります。その中でも一番東側に位置しますツァンラというのが、一般にシャルチョップカ、東の言語と言われていて、東の地域での共通語として使われている部分があります。

とはいえ、今ラジオ放送等々が全国にいくようになっていきますし、新聞等もゾンカで書かれていることから、ゾンカというのは共通語としての機能を十分に果たしていると言えます。ただ、こうした中央や東の村々でたとえばインタビューなどをするとき、こうした村に入ってゾンカで話をして、彼らは自分の母語で答えますので、かなり理解が難しくなってくるわけです。1970年代に調査に入った研究者も、中央からの官僚が村へ行くために通訳を連れて行ったことが記述されています。



次に南の地域ですが、この地域はほとんど丘陵部になっており、北部山岳地帯の寒冷地域、あるいは中間山地の温帯地域とはまったく異なる生態環境です。年中暖かく土地も傾斜が少なく農地としては比較的適しているのですが、北に住んでいる人たちにとっては暑過ぎるし、虫はいるし、どうも住みにくいということで、今まであんまり人が住まわれてこなかったところにネパール系の人たちが移住してきたという経緯があります。そのため、南部ではネパール語が多く話されています。もちろんネパール系の人たちの中にも言語集団はいくつもありますし、宗教的にも多様ですけれども、その中でもネパール語というのが共通語として話されてきていまして、ブータンの村でこれらのネパール系住民の村に近い人たちというのは、ネパール語も共通語としてしゃべれるという状況です。1人の村人が3~4の言葉を話しているのはアジアで非常に一般的な状況ですし、そうしたことでネパール語も共通語として使われています。とはいえ、ゾンカというのは国語として、政府は60年代から非常に強化しようということで力を入れてきています。

このゾンカ語の話者、主にもととのゾンカ語の話者がガロップといわれています。これはゾンカ語で言うところ、「もともといたもの」というほどの意味であり、自らが起源であるという自己認識に基づいているといえます。東の地域に住む人々をゾンカ語話者はシャルチョップと呼びます。これは「東の人々」という意味なので、完全にガロップ社会からの視点であることは間違いありません。南部のネパラーはローツァンパというのは南に住む人々という意味で、これもガロップから、あるいはシャルチョップから南側を見た目線で名称が付されているといえます。

一般的に「ブータン人」のことをゾンカ語でドゥクパと言いますが、そのドゥクパという語の下には、実際にはネパール系のヒンドゥー文化圏に属する人々を排除した、北部のチベット仏教文化圏に所属する人々のみが想像されてきたのでしょうか。

次に、「ブータン人」というカテゴリーのもとに想起される属性と、「他者」との境界とが、現代ブータンにおいていかに構築されてきたのかという点について、少し考えていきたいと思います。

「ブータン人」の属性と境界を定義する

研究状況について簡単にお話したいと思います。すでにお話したように、ブータン研究の分野ではその研究蓄積の少なさが、他の南アジア諸国に比較しても顕著であったのですが、90年代初頭に入ると徐々にではありますが、政治学や地理学の分野で研究成果が出されるようになります。そしてそれは、前述のネパール系住民の難民化問題が一つの契機となっていました。この問題発生を契機に国外からの注目が集まり、いわゆるブータン地域研究の中での研究蓄積が少しずつできていったわけです。しかしながら、難民問題を契機とした研究の多くは、難民化の問題を「民族対立」や「異民族排除」の問題として一定の枠に位置付けてきました。こうした枠組みは、「ネパール系住民」を対象化するなかで、同時に「ブータン民族」あるいは社会をも固有の伝統的な文化的単位であり一枚岩の存在として本質的・固定的にとらえてしまう傾向を生み出してきたといっていいいでしょう。

また、ブータン研究の中では「環境先進国」としての側面にも注目があつまり、自然環境保護をめぐる研究に多少の蓄積ができたわけですが、こうした研究では多くの場合自然保護をブータン民族が有する本質的な属性として位置付け、政府が実行する環境保護政策を国民の総意として一枚岩的に描き出し無批判に称揚してきた側面があります。

そうしたなかで、私の立場としては、ドゥクパを自明の民族カテゴリーとして本質的に前提せずに、



その属性と境界がどのような過程で定義され、つくられてきたのか、そのプロセスそのものをとらえることが重要であろうと考えています。今回の発表では、そうしたプロセスを、主に国籍法等々の法令と、5カ年開発計画の文書を基にみてみたいと思います。

先ほど言いましたように、ブータンは長らく自然の防御壁に堅く守られてきたとはいえ、マalaria撲滅後は南部の方も徐々に開拓され、ほとんどインドとのオープンボーダーのような形になっていますので、出入国は非常に日常的に行われていたわけです。そのなかで、50年代に入りますと、政府はチベットの政情不安定、あるいは中印国境紛争等々に向けたヒマラヤ地域の不安定状況の中で、南部国境地帯における出入国を制限し、さらに北部国境を閉鎖します。

この北部国境は、僧侶の文化的な交流および交易ルートとしても古くから日常的に使われてきていたので、それを閉鎖することは物流が途絶えることをも意味していたわけです。そのなかでブータン政府は今度は南側、つまりインド側に向けて門戸を開くことを決め、このときから南側との政治的・経済的なつながりを強めていくようになったわけです。そしてこの決定は、ブータンの現在につながる開発政策および政治、経済の在り方を大きく決定するものでもありました。

こうした大きな変化の中で、1958年、日本や諸外国に比較すれば非常にゆっくりとしたペースではありますが、ブータンにとっては初の国籍法が公布されます。ここではブータン国民の条件として、まずは血統主義が取り入れられ、父親がブータン市民であることが最初の条件とされました。また、帰化要件としては移住後の居住期間が10年間以上あること、さらに国内に農地を所有していることが求められていました。こうした比較的ゆるやかな帰化条件は、実際には領土内に定住する者をほとんど区別なく包摂するものでした。つまり、この当時の政府が求めた「ブータン人」像とは、国内に定住し、土地に根付いて農業を営む者という、非常にシンプルな姿であったのでした。

こうした状況、つまりこの比較的「国民」の条件が緩い状況というのは70年代にかけて徐々に変化していきます。つまり、国境の人的な交流を閉ざすことで、いったん国土に定着させた人口を、今度どのように均質化していくかということが問題になるわけですが、その際に先ほど主に南部に居住しているとご紹介しました「ネパール系」の人たちと、北部住民の間のいわゆる異民族間結婚の奨励を行います。これは婚姻をつうじて「ブータン人」内部の社会文化的統合と均質化を図ろうというものでした。これは実際に、奨励金をつくり、結婚した人には、お金をあげますという形で南北の地域の人々の交流を図ったわけです。

そして1977年になりますと、以前よりもちょっと厳しくなった市民権法が公布されます。ブータンでは国籍法の次に市民権法という名前が導入されていますが、ここはインドに倣っただけで特に大きな意味はないと思います。帰化に必要な居住期間は長くなってしまっていて、一般の申請者は20年間、公務員だったら15年間とされています。そして、ここで初めて文化要件というのが加えられます。これは国語、つまりゾンカ語と国史に関する知識を共有していること、という要件です。この国史というのは、学校教科書等をもてわかりますが、ドゥック派の仏教伝統、つまりシャブドゥンを起源とする国の創世史を意味していました。そして領域内に定着した人々を共通の言葉と歴史を通して文化的に均質化をしようと試みていったわけです。

こうしたいわば少しずつ国内の文化的な均質化を図ろうという緩やかな動きがあったわけですが、それが80年代に入ると、ブータン人の範疇というものをより実体化していき、さらにそれに当てはまらない人を排除していこうという方向性が見られるようになります。



1980年には婚姻法が公布されているのですが、ここでは外国人と婚姻関係を結んだ国民から、無償教育や資本援助を受ける権利を剥奪することが定められました。国民であれば当然受けられるそういった無償教育や農業に関する開発のための資本援助などについて、それを受ける権利を剥奪されるということで、ブータン人でありながらブータン人の境界に位置するような、そうした存在として追いやられるということが宣言されたと言えると思います。

1985年の「新市民権法」になりますと、さらに「排除」の方向性というのは非常に強くなっていきまして、ブータン人を血統と居住期間と文化要件によって分類し、要件を満たさない者を排除しようという方向に進んでいきます。この文化要件というのも70年代のときからは、さらに要件が増えていまして、言語、歴史、文化、慣習、伝統に関する知識といわれています。そして多くのネパール系住民が実質的に非ブータン人としてカテゴライズされていくという流れができていくわけです。

さらに1988年には、この1985年法に基づいて国勢調査が実施されています。これはこれに際して10万人を超える外国人労働者の数が確認され、開発労働力の80%を担っていることが報告されます。ブータンはもともと農牧業に依存する、いわば自給自足的な生活を行う人々によって担われてきた国ですけれども、門戸を南側に向かって解放した年からインドの援助による5カ年開発計画を導入していくことになりました。しかしながら、そうした開発のための余剰労働力というものを確保するのが非常に難しい状況だったわけですね。といいますのも、北部ブータンのチベット系の居住者はネパール系のコミュニティに比べると、そこまで多産ではないといわれていますし、人口増加率もそこまで高くはなかったといわれています。さらに厳しい環境の中で農業をするためには、人的資源というのは非常に不可欠だったわけですけれども、その中で余剰労働力を出せという政策が60年代初頭に取られます。これはドクドムといわれる制度なのですが、各世帯の15歳以上の男女をすべて、一定期間開発労働力として徴発すること決める制度でした。

しかしながら、こうした労働者が行く場所というのは、深い森と急な山肌を切り裂いて自動車道路を作るという非常に困難を極める工事であったために、やはりそうした技術力のない一般の農民を持ってくるときにリスクが非常に大きいですし、そして農村から労働力を取り上げてしまったことによって、農村地域の荒廃というものが一時的に進んでしまったということもありまして実質的に頓挫したわけですね。

そうしたときに70年代ごろから外国人労働者というものを非常に多く取り入れるようになりました。開発の資金のほとんどは当時インドから入ってきていましたが、それを使うための労働力もさらにインド側から集めるという形となったわけです。そして、インドからの労働者に加えて隣国のネパールの余剰労働力も入り込み、ブータンでは政府が関知しきれないうちに10万人を超える外国人労働者が国内に滞在する状態となっていたといわれています。そして彼らが開発労働力の80%を担っていることが報告されたわけです。

この報告というのは、ブータン政府にとって非常に大きな脅威として受け止められました。それはどうしてかといいますと、70年代、先ほど言いましたが1974年にブータンの隣国であるシッキム王国が、この国はもともと仏教王国だったわけですが、土着の人口よりも外から入ってきたネパール系の人口が非常に大きくなってきて中で、住民投票をしてインドの1州となるか、王政の下での独立を維持するかを選ぶということになり、その際に人口比で圧倒するネパール系住民によって、インドの1州となることが選択されたという、いわば「事件」が背景にあるからです。ブータン政府はこうした隣国の出来事



を目の当たりにして、王国としての存続が大きな危機にさらされているとの認識を深め、そこから数々の文化保護政策を強硬に導入していくようになるわけです。

先ほどの市民権法もそうですが、1989年には文化に関して国王が布告を出しまして、ブータンの主に西側の人々によって着用されていた民族衣装が、いわば国民服として定められまして、それを全国民が公の場所で着ることが義務付けられました。

そしてゾンカ語の習得はもちろんです、いわゆる「伝統的な礼儀作法」、ディグラムナムジャと呼ばれますが、それを身に着け実践することも義務付けられるようになります。この作法では、例えば高位、自分よりも位の高い人に対して振る舞う仕方というのが、非常に細かく規定をされていて、やれ、口を覆わなくてはいけないとか、儀礼用のスカーフをどう使わなくてはいけないとか、そういった細かな規定というのがたくさんあるんですけども、それをきちんと身に付けましようということで、それがブータン国民の義務となったわけです。

つまりこれまで、言語、文化、伝統というものは知識として求められていたんですけども、実際にそれを身体的に習得することというのが求められるようになったわけです。そして、そうした政策に対しては、やはりネパール系をはじめとする、そうした主流カルチャーに属さない人々によって大きな反発があったということは容易に想像できるわけです。

この時期のブータン人の文化的自画像をまとめてみますと、つまりはハイカルチャーの言語であるゾンカ語を話し、大乘仏教ドゥック派に基づく建国史を共有し、主流社会の慣習や伝統を実践し得る者として描かれていたわけです。

こちらの写真は、小学校で撮ったものと、各県にあるゾンと呼ばれる行政府と僧院が一緒になった建物前で撮ったものですが、写真はそこに入って行く正装用のスカーフを身に着けた人たちです（写真③）。学校では制服としてブータンの国民服となったゴとキラというのが導入されています（写真④）。ゴは男性用のもので、日本で言うところの丹前みたいなもので、くるぶしの長さまであるものを腰のところまでたくし上げて、ひざ丈にして着用します。この腰回りの布のたるんだところはほぼかばんとして使われ、何でもかんでもノートも入れるし、お金も入れるし、パスポートも入れるし、時にはマイクロチップまで入れて、いったいどうやって取り出すんだろうと思うんですが、皆胸元から手を差し込んで確実に探し当てます。



(写真③)



(写真④)

女性の方は長い一枚布の服をぐるりと巻いて腰をベルトで絞めて着るのですが、そこも胸の下のとこ



ろはたるみが大きくなっていき、そこに何でも入れていけます。こうしたものが制服として取り入れられていき、遠隔地では昔は無料で供給されていたんですが、最近は購入が義務づけられていて、生徒は皆同じ色のものを着ています。

こうして 80 年代末にかけてブータンでは、ヒンドゥー世界とはことなる独自の文化単位として、固有の文化を体現するような国民というものをつくっていきという政策が非常に強く行われてきたわけですが、80 年代末にかけて、こうした文化政策や国籍法の改変のなかで、南部の居住民の文化・慣習が徐々に周縁に追いやられていき、また国内に滞在する不法移民も排除される中で、最終的には、多くの住民流出をまねいたわけです。

さて、ブータンを流出した人々は、どこへいったかといいますと、そのままインドを通過してネパールの南東部へ入り、そこでネパール政府と国連の協力のもとに建設された難民キャンプに収容されることになりました。最終的にこの難民キャンプに収容された人は 10 万人に及ぶといわれておりますが、ブータン政府としては、難民化する途中で、実際にブータンから流出した者以外の人々、つまりインドに滞在していたネパール系住民や、ネパール南東部の貧困層なども含みこんで規模が拡大したのではないかと疑っています。というのも、難民キャンプ内では少なくとも安全な水や食料や住居が供給されるからです。さらに、これらの難民の多くは不法移民であり、国外追放は国家としての当然の権利であると主張しているわけです。しかし、当然ながら難民側は彼らは全員一度は「ブータン国民」として認定された市民であると主張しているわけですから、両者の主張はかみあわないまま平行線をたどってきたわけです。80 年代末から 90 年代初頭のこうした大きな政治・社会問題のなかで、当然国際社会の目は政府の「排他的な文化政策」へと向けられるわけですが、ブータン政府はこうした批判をかいくぐるべく、新たなブータン国家像を模索し始めるようになります。そうして生み出されてきたのが、「環境にやさしい我々」という自画像です。

「環境にやさしい我々」像の構築

先ほど言いましたように、ブータン政府は、環境先進国としての顔あるいは「自然と共存し環境を守り育てる」思想や倫理は、国のチベット仏教文化に根付いて、もともとあったという言い方をしています。こうした認識は、環境主義をかかげるグローバル市民社会や、ブータンに友好的な観察者たちによっても、比較的無批判に共有され、称揚されてきたといっているでしょう。しかし、実際に森林政策や環境政策の変遷をつぶさにみていきますと、政府の環境保護政策は内発的なものというよりは、90 年代のブラジルで行われたリオの地球サミット等々、グローバルな環境保護の運動や思想潮流というものに足並みを合わせるようにして進められてきたのであり、いわば外発的な要因に大きく左右されてきたといえます。

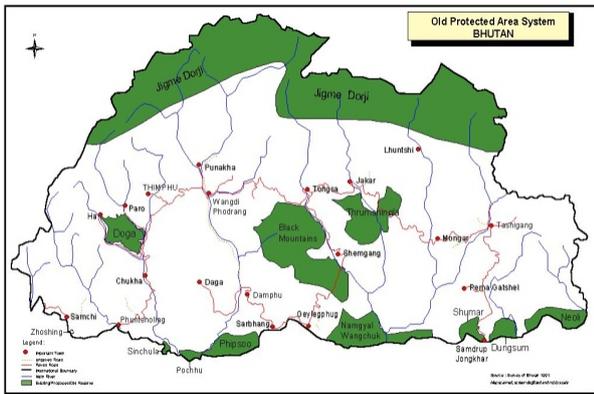
1993 年には自然保護区が拡大していますし、1995 年には自然保護法が出され、2008 年にはワンチュク王家の 100 周年を記念して、さらに大きな公園が作られ、2008 年までに何と国土の 50% が自然保護区になりました。

政府は、ブータンの自然保護というのはグローバルな価値と使命を持つこと、そしてさらに伝統文化を保護することがブータンにおいては自然保護につながるのだということを、この時期から非常に強く強調し始めます。

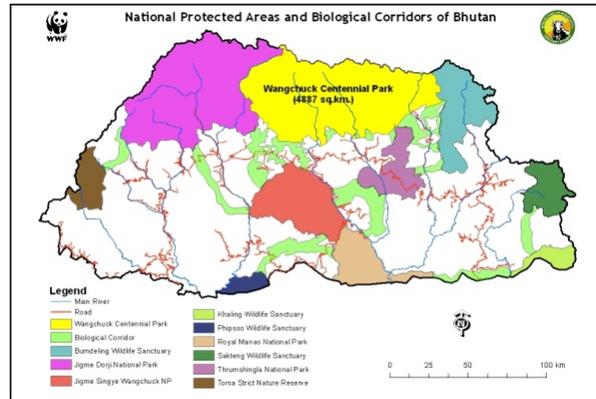
これはそれまでは文化政策としてよしとされていたものが難民問題の発生をとおして批判されるよう



になる中、自然保護というグローバルでキャッチーな価値を取り入れることによって、自らの伝統文化保護政策に対するグローバルな賛同を得ようという1つの意図というのが透けて見えるように思います。実際にブータン政府はこの時期から国内向けにもいろいろな環境政策を策定し、対外的なアピールだけではなく具体的に実体化していくようになります。



(図③)



(図④)

自然環境保護区の変遷をちょっと見てみますが、地図で最初はこのようにぎくっとした形で保護区が取り入れられていました(図③)。保護区という名前ではありますが、最も古い公園の一つであるジグミ・ドルジ国立公園では、私が調査を行った際には、村人はこの地域が古くは実際には王様の狩猟区であり、トラ狩り等々が普通に行われてきたと言っていますので、現在の意味での自然環境保護のためというよりは、王のための狩猟区から一般の住民たちを排除するためのものであったようです。そういうことはイギリスなどの国立公園の歴史をみても明らかであるようですが、そうしたことを契機にブータンでも自然保護区というシステムが取り入れられてきたわけです。この自然保護区は1998年に区画直しをされまして、ワールド・ライフ・コリドーを含めて3割程度が国立保護区となり、2008年にはワンチュク100年記念公園(黄色の部分)というのが新たに北部国境を覆うようにできまして、これによって北部国境地域はすべて自然保護区となりました(図④)。

こうした国境周辺だと公園レンジャーも銃を持って中国やインド側から入ってくる密猟者等々に対応しないといけないということがありますが、北部国境での地前保護区の拡大は、中国側の国境地域での攻勢というのが強くなってきたということとも、おそらく無関係ではないでしょう。

実際、私がブータンに滞在中に、こジグミ・ドルジ国立公園(ピンク色の部分)に調査に行ったのですが、その際あと2時間歩けば国境を越えられるという地点で、せっかくなので調査隊皆で行ってみようかと思ったのですが、結局何だかんだで止めようということにはなりました。その際に、外国人の調査者、つまり私、が国境地域に行ったということがインド政府の方に知られて、それでブータン政府が焦って私を捕捉しようという隊を出そうかと思ったのですが、私はそのときすでに5,000メートルの山にいましたので、今から行っても間に合わないということであきらめたということを後に聞きました。危なかったのですがなんとか免れて、国境を越えずにいてよかったです。

この辺は本当にトレッキングルートを歩いていっても1~2時間ですぐ国境を越えられるような形になっていて、遊牧民も多いので国境を越えた遊牧というも行われていましたし、コーディセプス



という冬虫夏草、中国の漢方薬として非常に高価に取引されるものがたくさん取れるので、中国側から多くの密猟者が入ってきているということがありました。そこで政府としては、その価値がブータン国内で認識されたあとで、これは守らねばということで、より多くのレンジャーが派遣されるようになったようです。

こうした政府の環境保護政策というのは、国連や多くの国際 NGO から結構評価をされていて、国連からも地球大賞を得ていますし、ポール・ゲッティー野生生物保護賞等を受賞するなど、ブータンは国際社会における名誉ある地位を獲得してきたと言えます。

ブータンは、やはり南アジア地域の中で見れば非常に小さいですし、インドへの経済的、政治的な依存から免れることはできないのですが、そうした中でグローバルな社会において、自らの名誉ある地位をいかに獲得するかということにおいて、環境保護というものを非常にうまく使ってきた国だと言えると思います。

先ほど言いました幸福大国、つまりオルタナティブな開発理念の提唱についてですが、これはもともと70年代に第4代国王によって提唱された概念なのです。それが90年代末にかけて政府内で再評価をされ、さらには国外にも紹介され再評価をされるようになったというのが現状だと思います。第9次5カ年計画では、政府がちょっと調子に乗って、これを開発計画全体の理念的な基盤として前面に出したわけですが、実際には具体的な政策と結び付けるのは非常に難しい概念ですから、ちょっと行き詰った感じがありまして、その後、指標をもう少し増やして、現実的に対応可能な指標にしていこうということ今試みているところです。

もともと、ちょっと言い出してしまったものの、国外の人がずいぶんと注目してしまったので、後付け的に何とかちょっとまともな指標として取り入れられるようにしようということです。私の友人がブータン研究センターというところにいるんですが、200問ぐらいのクエスチョネアを持って村に行くと、2日ぐらいかけて幸せ指標を確認しに行っているんですが、インタビューをする方もされる方も、もう本当に悲惨な感じで全然幸せ感、そのプロセスから発見できないのですが、この調査でどのような指標が生まれたかというのは結構興味深いところではあります。

また、ブータンでは環境戦略等でも「中道」等々の仏教的な用語というものが使われています。政府による開発計画の策定においては、物質的な豊かさに対し、精神的なものを強調するブータンの強固な大乘仏教文化の中にあるものはブータン独自の開発を歩む際に強い味方であるとして、仏教思想や伝統を開発政策の中にも位置付けてきたわけです。

選挙権と「ブータン市民」の境界変容

こうした中で、2007年にはブータンで初めての普通選挙が取り入れられたわけですが、こうした非常に劇的な政治体制の変化の中で、ではこれまでブータン政府が主張してきた文化的自画像、仏教文化に重きを置いた文化的自画像が、どう変わりつつあるのかという点を、選挙のプロセスの中での僧侶の位置づけから、少し見たいと思います。

いわゆる民主化プロセスにあるといわれるブータンですが、その実際の内容とは何かといいますと、これまで政党制が認められてこなかったなかではじめて政党制を導入したということ。そして普通選挙制度が導入され、憲法が制定されたことがあげられます。こうした制度的な変化が、民主化プロセスとして国際的な新聞等にも取り上げられたわけです。



少し眠くなっていっちゃるかと思うので少し写真をお見せしようかと思うんですが、これは選挙用の掲示板ですね。こうした掲示板が、わりと立派なものが屋根付きで、そこらの選挙区に立てられ始めました(写真⑤)。テレビでの候補者討論会というものも行われていまして、この画面の人は今ブータンの首相になった人でジグミ・ティンレイといいます(写真⑥)。



(写真⑤)



(写真⑥)

その対抗馬は私の友人でもあったシンガーソングライターといいますか、ブータンの伝統的な歌や楽器を教えていた人ですが、あえなく負けました。いろいろな人がこの選挙をチャンスと見て参入していたわけです。

しかし、リスクもすごく大きい。というのも、出馬のためには政府の公務員は退職しなくてはなりませんから。従来教育を受けた人口のほとんどすべてが公務員として雇用されることを望んできたブータンにおいては、選挙に出馬するという選択は、せっきやく得た資源をいったん完全に手放すということの意味しておりまして、その資源を再び手に入れられるかどうかは選挙の勝敗次第で、全く保証はないわけです。しかしながら、勝利の際に得られる資源も大きいので、やっぱり大きな変化に乗ろうという候補者も2008年の選挙にはある程度出てきたわけです。

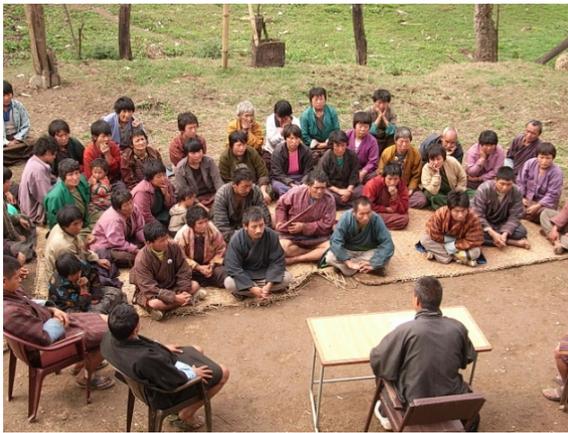
今回の普通選挙はブータン国民にとってははじめてのことですので、選挙と選挙方法についての啓蒙というのが必要になります。つまり選挙とは何で、その選択がどういう意味をもつのかということ、最初から説明しなくてはならなかったということです。国民にとっては、自らの為政者を選ぶという、初の経験なわけですね。村の人たちに話を聞くと、一番恐れているのは選ばなかった方が勝ったときに何かされるのでないかということでした。選挙では興奮と同時にそういう何か恐れというものも人々の中に同時に混在しており、こうした恐れをどう取り除いていくのか、ということも一つの課題であったようにみえました。そのため、選挙前にはいろいろな啓蒙の方法が試みられ、「投票案内」の冊子も作られ、そこら中に配られていたわけです。

政党というのは党员を持てるわけですが、自分の政党に支持者を集めるために、村落コミュニティでも政党メンバーの募集が行われており、いくばくかの会費を支払えばだれでもが政党のメンバーになれるというシステムがつけられました。そのため、村人のなかには自分が投票する選挙区で誰が候補者で、その候補者のどちらがいいかということを選ぶ前に、もうすでに政党の党员になってしまったという人が結構いまして、その場合はもう人を選ぶ前に投票する政党が決まってしまうわけです。



ね。

郡長による説明会が選挙の前日、あるいはその前からずっと行われており、数日前に村の集会では、各世帯から必ず1人は出よとなり、子守をしている人が出てきましたが、ここで一番の注意事項は、選挙当日に酒を飲むなということでした(写真⑦)。



(写真⑦)



(写真⑧)

この村は本当にお酒を飲む地域で、農閑期の冬になると収穫した穀物で作った酒を四六時中飲んでいきますから、そうした中できちんと、けんかなどをせずに投票をしてもらうためにも、お酒を飲むなと村長は一生懸命に注意をしているわけです。夜になると隅っこに集まって、村の人たちの中での討論というも行われてきていました。

この選挙をするために何が重要かといいますと、まずは写真付きの市民証が必要です。これは以前のものを選挙に際して再度作り直すことが求められました。その後、作り直したものを持参して、写真付きの投票人IDを取得します。ブータンでは村をはなれた人が実際の居住区で投票をすることができません。というのは、もともと所属していた、生まれ育った本籍地に戻って選挙をしないといけないからであり、ブータンの選挙の数日前というのは、国内では大規模な人の大移動が起こっていました。選挙管理官も一応各投票所に配置されていました。

投票所に向かうためには、すべての投票所が自分の家の近くにはありませんので、遠隔地から何とか村人のトラックの後ろに乗って、朝からえんやこらとやって来て投票して帰る。ほとんどピクニックのような形で投票が行われていたわけです。

投票機械がインドの援助で導入されていたんですが、識字率はそこまで高くありませんので、やはり顔と政党のマークによって選べるように配慮がされています(写真⑧)。選挙を終えた後は指にマジックで線が付けられます。二度来るなよということでしょうか。

テレビを使った選挙速報というのも試みられました、これは日本の援助で行われたと聞いていますが、ブータンテレビ史上初の生中継が行われた瞬間です。このように開票状況が示され、横のクエスチオンの書いたボックスに、後で勝者の顔が出るという形になっています。

ブータン国王としては、注意深く二大政党制を選択し、さらに両政党の党首とも大臣経験があり、国民の人気もあり、王家にもゆかりのあるような人たちを選び構成することで、票を平等に分けて美しい二大政党制が始まることを予想していたようですが、ふたを開けてみれば、PDP と呼ばれる1つの政



党が2議席しか取れずに、他方のDPTが議席を独占する形に終わってしまい、もうほとんど二大政党制と政治体制を位置付けるのは難しいような結果となったわけです。この選挙結果が導き出された原因についてはいろいろな分析があるのですが、今回は省かせていただきます。

ブータンにおける国会の歴史をみてみますと、国会自体は1958年に成立しています。その際注目すべきは国会議員の構成員の中に10名の聖職者の代表が入れられていたということです。また、候補者資格は25歳以上ということでしたが、2007年以降は、大学卒業資格というものが求められるようになりました。つまり大学卒業資格を持たない者は立候補ができないという、世界で見ても非常に稀ですが、近年の教育熱が、こういう部分でも反映されてきてしまったというところはあるかと思えます。

最近ブータンでは博士号や修士号を取ることが、公務員制度の昇進制度が改変されたことによって、すごく増えていまして、十年以内に公務員のなかの修士、博士取得者の割合はずいぶん上がるのではないかと考えられます。他方、投票者資格については以前と大した変わりはなく、18歳以上の者となっています。

この中で、別項で選挙プロセスへの参加に不適合とされる者というのがありまして、この中で王室の成員と宗教者が排除されることになりました。ここで、ブータンの政治や社会における仏教界の位置づけについて見直してみたいと思います。これまで国旗と国章には、聖俗両界の調和と統合を示すために象徴的に図柄が選ばれてきましたし、政府の僧院で学ぶ僧侶たちというのは、政府や国民のサポートを継続的に受けてきたわけです。また政府だけではなく、私立の僧院でも外国からファンドが取れるお坊さんというのが結構いまして、彼らが僧院を運営しているので、実際には政府の僧院よりも資金が潤沢で、わりとゴージャスな法要が執り行われていたりすることもあります。法要には各地から非常に多くの方が訪れます。

村の各寺の中でも法要は行われています。この寺は結構古いお寺で、毎年必ずわりと地位の高いお坊さんを連れてきて、ラマとして法要を執り行うということが行われています。これは寺の中ですが、このようにみんな献金を持ってお祈りに来るという形です(写真⑨)。ほかにも、僧侶というのはさまざまな役割を村で果たしていますが、その1つが病払いの祈祷、あるいは豊穰、厄よけのための祈祷というものがあります。



(写真⑨)

私が継続的に調査している村の一つでは、病気になったときに最初に病院に行くと答えた人はほぼ1



人もおりませんで、最初にまず村の占い師・祈祷師の人に見てもらおうという話でした。まず祈祷師に何が悪いかを占ってもらい、それで指定された法要を行う。それでもだめだったら、ブータンでパウなどと呼ばれるシャーマンたちが、その近隣の村にもいるのですが、彼らをさらに呼んできて、さらなる法要や祈祷を行うということなのです。さらにそれでもだめだったら、村にある保健所（ベーシック・ヘルス・ユニット）という小さな診療所に連れていき、そこで重病だと言われれば町の病院に搬送されるという形で、病院というのは優先順位の中で一番低いようでした。村人の中には僧侶の祈祷というのがまず行われるべきだというのは非常に強く根付いています。

実は村だけではなくて、町などで非常に高い教育を受けた人の中でも、まずは法要という人が本当に多いです。このように社会の中に非常に根付いてきた中で、宗教者の僧侶というのが今回の選挙法によって、選挙権のない市民へと排除されていったということがあります。

これはまずは選挙者名簿に登録された僧侶が排除されるわけですが、それと同時に宗教の財団に参加している人も排除しようという方向も出ていまして、そうすると、もう普通のビジネスマンや公務員が宗教をサポートする財団にも入っていますから、そう考えると国民の10割近くが宗教関係者ということになって、排除されるということも起こり得るような状況になっているわけです。

まとめですけれども、これまでみてきた2007～2008年の選挙というのは1人1票の投票権を通じて、村落地域に暮らす国民に広く政治への参加を促したわけですが、一方では仏教僧たちが民主化の名の下で、公の政治領域における市民権を奪われるという皮肉な状況になっています。このように、新しい選挙法は選挙権の行使によって政治参加を果たす近代的市民であることと、仏法と仏教的な価値に従って生きる宗教者であることという2つの自画像を、いわば観念的にも物理的にも共存不可能なカテゴリーへと分類しつつあると言えるかと思います。それは、仏教的価値を開発においても重要視し、僧侶を社会の価値形成のための重要な担い手として位置づけてきたこれまでの方針とは、大きな齟齬をきたしているようにもみえます。政教分離を押しすすめるこうした選挙制度が、ブータンの社会における仏教や僧侶の役割をも変えていくのかどうかは、今後とも注目していきたいと思っています。

質疑応答

（司会） 宮本さん、ありがとうございます。もうすっかりブータンについて私は分かった気持ちになって、早速「ウィキペディア」の編集にかかろうかと思ったりします。今日のお話は3つぐらいに分かれていますと思いますが、一番最初は歴史的な話で、ブータンという国民、ブータンという国家がどうつくられてきたかという部分だと思います。

次の部分はかなり省かれてしまったのですが、幸福大国というものを、何かアイデアマンの首長がぼーんと思い付いて、これはいいなと始めたように受け取れるのですが、どの程度内部からできたものなのか。あるいはあまりにも国際社会とぴったりしているので、誰かが外から入れ込んだような感じもしました。もし可能であれば、その辺も教えていただきたいと思っています。

最後の部分は民主化で、その過程で世俗が分離されて選挙権がない国民が出ているという部分です。この部分もやっぱり旧ソ連をやってきた我々にとっては、民主化で今10年ぐらい前に起きたことが、またブータンで再現されているような気がして、やっぱり東欧と比較すべきはブータンだと私は思いました。

やっぱりこの部分でも、東欧とか旧ソ連の民主化でもそうなのですが、外部からの影響というのが非



常に多くて、外をちらちら見ながら、自分たちの立ち位置というのを決めるというのが、あったような気がします。日本の援助というものが少し紹介されていましたが、国際社会の影響とか指導というのがどの程度あったのか。

これだけ見ると、あまりにも正しい方向に進んでいるような気がして、世俗も分離して、きれいに宗教を排除しましたというのが、ちょっとあまりにもきれい過ぎるので、外の影響がどれぐらいあったのかというのは、私は何となく聞きたいと思いました。

では私の話はこれぐらいにして、会場からまず質問をいくつか集めて、それでいくつか集めた上で宮本さんに回答していただきたいと思います。では質問のある方は挙手をお願いします。どうぞ。

(Q) 私も韓国の民主化の研究をしているものですから、民主化の話はとても興味深く聞かせていただきました。2つ質問させてください。これが正しい選挙であるということは、いったい誰がそれを言っているのでしょうか。例えば韓国の場合は、わりと民主化運動をやっていた方々が代表制であるとか、表現の自由とかというのを訴えていた上で、民主化を推し進めていってという背景もあるものですから、韓国のことを考えていると、いったいブータンでは誰がそれをデファインしているのか、定義しているのかというのがちょっと疑問でした。

あともう1つは二大政党制にしようと言いつつも2:45という、わりと一党制単独のような結果になってしまったのでしょうか。例えば韓国の場合ですと、韓国だけじゃなくてアメリカもそうですし、イデオロギー体質とか、もしくは弾圧があってとかでバランスが悪くなったりとかすると思うのですが、これもブータンの場合は、このディビジョンは何で生じたのか。

(司会) ありがとうございます。ではまた質問のある方、どうぞ。

(Q) とても面白い報告をありがとうございました。基本的なことをいくつか教えてほしいんですが、選挙についての啓蒙の掲示だとか、それから選挙人カードですね。英語でかなりの部分を書かれていましたが、英語がどのくらい通じるのか。ゾンカ語が一応国語なのだけれど、これだけ多言語状況の中で英語も共通語の地位を持っているということなのか。それからイギリス領、インド領になったことがないにしても、やはりイギリスやインドとの付き合いということが、その背景にあるのかということですね。

それから国会、選挙の話は非常に面白かったのですが、これが民主化なのかということを理解するためには、もう少し制度的なことを知りたいんですが、ここで選ばれた議員たちは、政府とはどういう関係にあるのか、議院内閣制なのか、それともそうではない首相や大臣の選び方をするのか。それから国王と国会というのは政治的にどういう権限の分け方をしているのかということですね。それから最後に言われた宗教関係者に選挙権がないというのは面白いし、コントロールバーシャルな話だと思うんですが、現地ではこれについての賛否、どういう議論がされているのか教えてください。

(司会) ありがとうございます。ではいったんここで民主化の部分について質問が多かったので、宮本さん、お願いできますか。



(宮本) ご質問ありがとうございます。まずは正しい選挙を誰が決めたかということについて。今回文化的自画像の形成という形でご説明を少ししてきましたが、ブータンがインド、中国、その他、南アジアの周辺諸国などとの国家間関係において非常に弱い立場にある中で、グローバル社会の潮流やニーズというものに非常に敏感にかつ直接的に呼応することで活路を見出してきたということは、環境政策等々を見ても明らかであると思います。君主制は一般的には専制におちいる可能性を胚胎するという意味でも批判を受けやすい制度ですが、その中でブータンでは「環境にやさしい」国民性や、国民の幸福感の高さを前面に出す中で、君主国家でありながら非常によい統治を行っている国だという評価も得てきたわけです。しかしながら、やはりグローバルな政治潮流のなかで民主化が理想的な国家統治の制度として推奨される中、王室政府は常により民主的な制度へ踏み出す契機をうかがってきたという側面もあるわけです。ブータンでは国王は常に、国民統合のシンボルであり、同時にグロス・ナショナル・ハピネスというコンセプトの提示にしる、様々なアイディアを提案するアイデアマンでありました。政府においては、行政の長を退いたのちも、国家元首として力を維持しつつ、様々な政治的な意思決定をしてきたわけです。今回の民主化のプロセスに関しても、国王に限られた側近たちとの話し合いの中で、その時期や制度の概要を決定したわけです。

その時期をワンチュクの100周年記念の年に当てたというのも非常に戦略的です。それによってこれまでの環境保護や文化政策に重きを置いて、経済はいわば後回しにしてきたような政策を劇的に転換するためにも、新しい世代として第5代国王に、自分が死んでもないのに、政権を移譲したというのは、転換をアピールするための巧妙な装置であったと思います。

ですから普通に考えれば国王がイニシアチブを取ったというのは明らかだといえます。選挙に際しては、公正な選挙が行われたと認められなければ意味がありませんので、EUの選挙監視団などを積極的に入れることで、その公正さをアピールしています。そしてそれらの機関や国際社会からの提案を常に仰ぎつつ、それらと歩調を合わせながら政策をすすめているわけです。ですので、ブータンの場合、国内政治というよりは、国王の決定と国際社会の潮流というものが、政策決定に大きく影響し、政治を大きく動かしていると言えるのではないかと思います。

次に選挙結果についてですが、野党となった政党にとっては2議席のみという悲惨な結果になった選挙でしたが、これによって政府自体も想定していた二大政党制が達成できずといった結果になったわけです。この党首に関してですが、実は第4代国王は4人妻がおりまして、4人姉妹なんですね。そして、姉妹のお兄さんが一方の政党の党首として立ったわけですが、彼は何と自分の選挙区でも負けてしまったわけです。しかし、こうした結果は政府も国民の側もまったく予想していなかったようです。

というのも、私が村に入ったときもPDP政党を支持する人々というのは非常に大きなうねりがありました。彼はもともと農業大臣をしていますので、それによって資源を村に持ってくるのが可能でして、農道を作るであるとか、農業的な開発支援をすることとかいうことを、いろいろな地方で実施し、政策実行能力や、資源動員力をアピールすることができていたわけです。こうした戦略は、特に開発から取り残されてきた村々では非常に効いていて、彼の場合は信奉者みたいな人がたくさんいたわけです。

だから直前までは二大勢力は拮抗しているように見え、むしろPDPの方が優勢な地域もあったわけです。しかし、そうした流れがなぜ変わったかということ、1つ予想されるのは、中央政府の公務員の影響です。制度の説明でも少し言いましたが、選挙ではすべての国民は自分の住民登録地へ戻って投票を行わなければいけません。そのため、中央政府の官僚で公務員として働いていた人たちも選挙では一斉



に村に戻ることになるわけです。村落社会では、教育があり、村に現金をもたらし、かつ政府の役人とコネのある彼らの意見というのが非常に影響力をもってしまうという状況があります。そして、この選挙の際に、これらの公務員たちが支持した政党というのが、圧倒的な差で政権与党となった政党 DPT であったのです。

実際のところ、2つの政党に政策的な違いはほとんどありません。というのも、政策を競うにも、向こう5年間の5カ年開発計画は既に決定されており、新しい開発計画が加えられる状況ではなかったわけです。しかしながら、勝利した DPT は、文化保護や伝統的な価値の重要性を説くなど多少政策的に保守的な傾向があり、それが変化を望まない公務員たちの支持を集めたといわれています。

また、もう一点指摘されているのは、これはうわさ話ですが、PDP 党首であった王妃たちの兄の父親の存在が、兄の当選を阻んだという説です。この父親は若いころから様々なビジネスをとおして力をつけてきたのですが、強欲で知られた人として、彼らが政治的な中枢になったときに土地や財産を奪われるのではないかなど、様々な憶測がとびかったことが、村人の PDP 離れを加速したなどといわれています。

次に選挙についての啓蒙等が英語で書かれたという点について。これは説明不足で大変申し訳なかったのですが、ブータンでは国語であるゾンカ語を教育言語にしようとする動きが60年代からずっと続いているのですが、その背景にはこれまでの教育がすべて英語で行われているという状況があります。もともとブータンで近代教育を取り入れようとしたときに、やはりインドの援助というのは不可欠でして、最初はインドの教員がヒンディー語の教科書を使って教えていたわけです。しかし、その後インドの教育でも英語に重点が置かれていくなかで、ブータンでも教育言語を完全に英語に転換していきます。だからブータンで現在までに教育を受けた人はほとんど全員英語が話せるわけです。しかし政府は一方で、国語としてのゾンカ語の地位の向上を図っており、新聞のゾンカ語版の発行を義務付けたり、行政文書の国語化を実施したり、ゾンカ語の識字教室を展開したりしているわけです。そうしなければゾンカ語が廃れていくという危機感があるわけです。たとえば、地方出身の公務員たちなどは、特にゾンカ語が母語ではないですから、人前ではゾンカよりも英語で話すことを、より好むという人も多いわけです。ブータンにおける英語の状況というのはそうした形です。

次に国会と内閣府との関係ですが、内閣府は二大政党による小選挙区制で選ばれた下院議員のなかから選出されます。現状を見る限り、内閣に入るのは選挙で政権与党となった政党の党員のみであるようです。そして、首相は政権与党の党首が就任しており、基本的に議院内閣制であるといっていでしょう。

次に国王と国会の関係についてのご質問ですが、ブータンは実際に1998年までは国王は国家元首であり行政の長であったわけです。しかし、1998年に国王が行政の長を退き、その権限を、国務大臣が輪番制で努める首相職に移譲することを決めています。しかしながら、実際のところ国家統治における国王のイニシアチブというのはその後も確実に維持されていました。国会の決議についても、間違った方向にいつていると国王が考えた時には、国王が「天の声」で案に修正や再考をもとめることはしばしばあったわけです。そうした力関係が、今回は憲法制定等をとおして、もう少しきちんと限定された形で位置付けられています。基本的に民意で選ばれた国会が国権の最高機関であるわけですが、国王は非常に問題があると考えた決議に対して、それを1度だけ押し戻す権利を与えられているのです。いったん国王が再考を促して差し戻した決議を、もう1回国王に持ってくるのは王権がいまだに絶対的



な影響力を持つ現在のブータンの政治状況では現実的に難しいですから、内容を何かしら変えないといけないという、そういう力が働くということは明確であると思います。

最後に、宗教者を排除するという選挙法について、国内の反応ということですが、宗教者を排除した1つの大きな理由としては、やはりブータン社会において宗教者の持つ力というのが、あまりにも大きいということがあると思います。

「人の生き死に」に関しても、先ほどお見せした祈祷に関しても、村の豊穰なり家の豊穰なりを願うための法要についても、すべてにおいて仏教僧が不可欠となっている社会状況において、高い功德を積んだ高僧というのは非常にあがめられているわけですね。彼らが政治にしる何にしる、何か意見を言うということは非常に影響力があるわけです。

そうした中で、結局のところ宗教者を排除するという結論にはなったのですが、これに対して宗教界の長である大僧正は、選挙の1週間前ぐらいにティンプーからは遠く離れた地域の山奥の寺に籠り、瞑想生活に入ること、自らが政治に関心のないことをアピールしています。宗教界の長がそうした態度を表明した以上、国の直轄の僧院の僧侶が何か活動をするということはもちろん難しいですし、私立の僧院においても、それに倣った形で、反対運動や声明のないまま、選挙は穏便に行われていました。ただ、私立の僧院の僧侶に関しては、ある程度政府から独立した力を持っているので、将来的に行動を起こす可能性もあるかもしれませんが、今のところは従順な様子です。国民については、新聞紙上などでは、選挙委員会の決定に賛意を示すものも多いようでした。その理由の多くが、僧侶が政治にまみれるべきではないというもので、概ね政府の主張をなぞるものであったといえます。

(松里) たぶん私の聞き漏らしだと思うんですけど、王族と聖職者が排除されたことで、国民の潜在的有権者の何パーセントぐらいが排除されたことになりますか。

(宮本) 宗教団体に入っている人も含めると10%近くが宗教者として認識されていると一説では言われています。

(松里) ここで見てみると、政治をやると、それは宗教への打撃になるとここでは書いてありましたね。その正当化する理由として。宗教機関の長は選挙プロセスの中で選挙キャンペーンに参加したり投票したり影響を与えることは慎むべきである。宗教者は政治の上位に置かれるべきである。宗教的な長や僧侶に対する制限は、より偉大な徳のためであり、宗教共同体の一般的な利益のためにあるのですが、そうすると、これは人権を侵害、宗教聖職者が市民権を奪われているというのは、だいぶ違うような感じがするんですけども、世俗化という意味じゃないでしょう。おそらく憲法上、世俗化というスローガンは掲げないと思います。

これは日本の皇室なんか政治活動を禁止されているのは、政治に対する皇室の介入を排除する、なくすためということもあるけど、皇室を政党政治から守るためというのがあると思うのです。脱社会主義国の憲法で、一時期までは大統領の政党帰属というのを禁止している場合が多かったんですけど、これもやっぱり大統領の権力を政党から守るという性格があるので、世俗化というのを追求しない国家で、宗教も政党政治から守るためにこういうことをしているということは考えられないんでしょうか。

つまり逆に言うと政党政治というものが、影響を及ぼせる政治領域というのが非常に狭くなっちゃう



わけですね。国民に影響力を持っている人たちを政党政治から排除したとしたら、今度は、その政党政治の影響力は低くなるということになるでしょう。だからこれはやっぱり聖職者の人権が侵害されたということとは、ずいぶん違うのではと思います。

(宮本) そうですね。政府自体の説明としては、宗教は政治の上部におかれるべきだという言い方をしていますので、もちろん政府からは宗教者を排除しているという形の説明はきかれませんが、ただ、実質的にブータンで高僧、徳の高い僧侶の地位にある人は、それほど多いわけではありません。彼らの下には、幼年で送り込まれた少年僧・青年僧たちが、何百人と層をなしているわけです。

以前は、ブータンの仏教社会では世帯に3人息子がいたら1人を僧侶にするのは家にとってもよいことだと考えられていたのですけれども、最近はやはり世俗の教育を受けたい、受けさせたいという中で、子供を僧侶にすることを昔よりは全面的に肯定できない状況だといえます。しかし、それでも送り込まれる者たちは、やはり親を亡くした子供であるとか、あるいは経済的に食べていけない世帯が自分の子供なり姪、甥なりを、いわばセーフティーネットとしての僧院に送り込んだことで、望むと望まざるにかかわらず僧侶になった者たちだといえます。

松里先生のおっしゃる視点はもっともなのですが、選挙における宗教者の排除を、所属社会や村落のなかで既に周縁化されてきた者たちが、さらに政治領域において市民権を奪われ周縁化されていく過程としてとらえるとすれば、これはやはり少し難しい問題なのではないかと考えています。

(長縄) 皆さん後半の方を質問されたので、ちょっと私は前半の方で関心がありました。ネパール人を排除する問題で、70年代にはかなり民族間結婚の奨励という形でネパール系の人々との婚姻が進んだということをお話しされて、80年代には外国人労働者としてやって来るネパール人を追放するというところをおっしゃっていたと思うのですけれども、80年代から90年代の頭に追放される人々というのは、外国人労働者をターゲットにしたことだったのか、あるいは、そういったすでに婚姻関係が非常にもう深まっているようなものを引き裂くような形で行われたのかということを確認したかったのですが。

(宮本) ありがとうございます。基本的には、この時期に排除されたネパール系およびインド系の住民というのは、「不法移民」というカテゴリーの中に入れられて排除されています。

しかしながら、その不法移民あるいは不法滞在者を定義するプロセスというのがやはり問題でして、そこにおいて、これまで国民として見なされてきたネパール系の住民が、新しく出された市民権法によってブータン人ではないものとして再度カテゴライズされたときに、彼らは結局のところ不法滞在者というカテゴリーに入れられることになるわけです。そのうえで、国外に排除されたわけです。ですので、北部住民との婚姻関係にあった人々も、もともとの市民権が不法に取られたものであると見なされた場合は、容赦なく国外へ出されたというのが、この時期の状況だったと思います。つまり、国外流出した人々は実質的には土地に根付いたネパール系住民と新しく雇用されていた労働者の両方から構成されていたと考えられます。

(司会) ありがとうございます。では時間が来てしまったので、そろそろお開きにしたいと思います。



す。今日、宮本さんにお話しただいて、ブータンってまったくアジアの僻地かと思ったのですが、起きていることは我々100%理解できることがあるというところに非常に驚きました。もう少し勉強が我々は足りないと思いました。では最後に宮本さんにもう1回拍手をお願いします。



近世後期の奥蝦夷地史と日露関係を考える

日時 2011年5月26日、北大スラブ研究センター4階大会議室

報告者 川上淳（札幌大学文学部教授）

（川上）

こんにちは、川上です。私は2月に今日の講演と同じタイトルの本を出しまして、今日はその紹介になります。お手元にはその目次と最後のまとめのところをコピーしたものを資料にお配りいたしました。最初にざっと目次を見て、それから写真や絵なども用意してきておりますので、特にクナシリ・メナシの戦いとラクスマン来航についてお話して、最後にもう1回、この本で書きたかったことを簡単にご紹介してまとめにしたいと思います。

著者『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』について

私は26年間、根室市で学芸員をやっておりました。そこでまずは、いつも話題になっている北方領土問題についてお話ししましょう。根室は市民の関心も非常に高く、千島列島もよく見えます。例えばクナシリ島なんかは本当によく見えて、1度だけですけども、私もビザなし渡航でクナシリに行ったことがあります。また、色丹島に行く機会もあったのですが、天候が悪くて途中から引き返してきたのです。それで、色丹島には行ってません。というわけで、1回しか行っていないところの歴史を、ずっと考えていろいろ調べてきました。今回の本も、大部分は根室の博物館準備室の紀要に書いてきたものです。まず目次をちょっと見ていただきたいと思います。

構成は第1部と2部に分けて、第1部では近世後期の蝦夷地、東部のアイヌ社会を論じています。それともう1つ、今回のタイトルにありますように、奥蝦夷地というのはいったいどこを指すのか、もです。特に近世の後期段階ではやはり、ある程度の定義が要ります。だいたい石狩低地帯、これを境に、石狩から今の苫小牧付近を境に、北海道の北、東の方を奥蝦夷地と呼んでおりました。

ですからそれよりも今の道南地方、...まあ、松前が中心というふうに考えていいと思いますけれども、その松前に近い方を、近い蝦夷地と書いて、近蝦夷地（キンエゾチ）と呼んだり、あるいは口蝦夷地（クチエゾチ）というふうに呼んでおりました。先ほど言ったように石狩低地帯を境にだいたい松前から遠い方を奥蝦夷地、あるいは遠いので遠蝦夷地（トオエゾチ）というふうに呼んでいました。今回、第1部で取り上げたのは、北の方の稚内、宗谷の方はほとんど考察の対象になっておりません。東の方といってもアッケシ以東、根室、クナシリ、エトロフあたりを対象にして考えました。

ざっとその内容を紹介いたしますね。後でお話しするクナシリ・メナシの戦いもラクスマン来航も、江戸時代の寛政年間、だいたい1700年代の終わりぐらいですが、これ以降のことはよく分かってきています。というのは、こういう大きな出来事が2つも続いたのが寛政年間ですので、その記録がかなり多く残されているからです。それより前の様子というのは、寛政の前は天明という年号ですが、皆さんもご存じのように、田沼意次が老中の時代です。このときに蝦夷地に初めて江戸幕府の調査隊が来るわけです。そのころから蝦夷地について幕府が非常に関心を持ち始めたのですね。

その理由ですが、1つは経済的な面、もう1つはロシアとの関係、の2つです。特に東蝦夷地、奥蝦夷地の東に日本の幕府の目が行くようになった、関心が持たれ出したわけですが、そういうときにアイ



ヌの蜂起、クナシリ・メナシの戦いが寛政元年に起こるわけです。そしてその3年後、寛政4年にラクスマンが日本に通商、通好を求めて最初に着いたのが今の別海町の沖です。彼らはそこから根室港に入港して一冬を過ごし、それから翌年に船で箱館まで、さらに松前まで行って、そこで幕府の使節と通好交渉をします。このころから具体的に日露の関係ができてくると思います。

そして目次の第2章と第3章にあたりますが、クナシリ・メナシの戦いをテーマにして、このときのアイヌの有名な首長、イコトイ、ツキノエ、ションコという人たちがいますけれども、こういう人たちの家系や、戦いの前、あるいは戦いの渦中はどうだったか、そして戦いの後にはどうなったかということ、具体的に述べました。そしてクナシリ・メナシの戦いの死者、指導者など、他にもいろいろ史料はあるわけですが、アイヌ側も、あるいは殺された和人側の名簿を整理し、史料の成立過程などについて考察を加えています。

次の第4章、第5章はチャシの話です。チャシというのは遺跡ですが、現在も北海道に400～500カ所、残されています。クナシリ・メナシの戦いのときが、ちょうどこのチャシが造られた最後の時代、消滅期だと前からいわれましたけれども、それについていろいろ検討したのです。

チャシというのはいわゆる砦（とりで）の跡です。文献上では、やはり砦と言えるわけですが、考古学上はもっと多目的なものとされています。例えばお祭りをしたとか、談判をしたとか、見張りの場所であったとか、資源監視の場所であったとか、いろいろなことがいわれているわけです。けれども、そういう砦としての機能が何でこの時期になくなってしまったのかというようなことを、第4章、第5章ぐらいで考えてみました。

それから次にもう皆さんもご存じのように、最上徳内とか近藤重蔵が蝦夷地の幕府の役人として、2人は、全然身分も違いますが、非常に大きな役割を果たしているわけですから、彼らが考えた蝦夷地と蝦夷地政策がどういうふうにして出来上がって、そして幕府のその後の政策にどのようにつながっていたかということ、6章、7章で考えてみました。

8章ではアッケシの国泰寺、これはご存じのように蝦夷三官寺の1つです。ちょうど東蝦夷地が幕府の直轄地（それまでは一応、松前藩の交易地だったのですけれども）になって、幕府の政策として造られたお寺です。そこでのアイヌとの関係について述べました。

それから第9章については、『加賀家文書』がテーマです。加賀家というのは今の野付半島に来ていたいわゆる通詞、アイヌ語通訳ですが、今、別海町では加賀家文書館という資料館もできて、その史料を保管して展示しています。いい史料がたくさんあって、当時の東蝦夷地の様子がかかり分かります。この本では、ネモロ場所ということで、生産とか価格とか賃金だとかについてまとめています。

ここまでの第1部です。続く第2部につきましては日露関係と千島について考察しています。第1部と第2部はつながっておりまして、別々のものではありません。第1章では今まで千島の歴史に、どんな研究があったかということについてまとめました。

それから第2章、第3章につきましては、ラクスマン来航についてのいろいろな史料を検討し、特に絵図史料が何種類か残されているので、それがどういう事情で成立したか、それを比較して、どういうことが分かったかを検討しました。

第4章につきましては、『菜の花の沖』などで有名な、ゴロヴニン捕囚事件についてです。文化年間にいわゆる露寇事件というのがあり、日本側はそのリアクションとしてゴロヴニンというロシア人を捕虜にします。リコルドはゴロヴニンの部下でしたが、そのリコルドが高田屋嘉兵衛を連行してカムチャ



ツカに連れていくという事件が続いて起きました。そこでいろいろ2人の間で信頼関係ができてくるわけなのですが、こうした日露のちょっと緊迫した状況の中で、高田屋嘉兵衛が果たした役割というのは非常に大きかったということを書いて、それより前のラクスマンの来航とか、レザノフの来航と、このリコルドの交渉がどういうふうになっていたのか、同じだったのかということも考えてみました。

それから第5章、6章につきましては、特に千島列島のアイヌについて考えたものです。享和3年ぐらいに、幕府の政策によって千島列島にかなり自由に行き来していたアイヌの人たちの交易ルートが、幕府によって遮断されました。それでも千島列島の中部ラショウ島とか、オンネコタン島とか、そういうところのアイヌの人たちがクナシリ島とかエトロフ島の方に交易を求めて来たんだということを、なぜ来たのかというようなことも含めて考察しました。それには鉄鍋とかラッコの皮などの商品と非常に関係が深いということも考えてみました。

それから第7章以降は、千島列島に日本から漂流民が結構、江戸時代に行っている。実際、帰ってきた人たちが、自分たちが直接でないにしても、人に語ったものも含めて漂流記が残されておりまして。まずこの漂流記を整理してみたわけです。それによって日本側では先ほど言ったように幕府によって交易ルートが遮断されてから、ウルップ島より向こうの様子ほとんど分からなくなっていたのですが、この帰ってきた漂流民が見たり聞いたり経験してきたことが、当時の千島の中部、北部ぐらいの様子を非常に反映して分かる史料ということで、それから千島の歴史が復元できないだろうかというふう考えたわけです。

というのが、本の目次です。全部をお話するのは無理なので、最初の部分から、クナシリ・メナシの戦いとラクスマン来航について今日はお話します。

クナシリ・メナシの戦い

ここで少しこの画面を見ていただきましょう。見た写真もたくさんあるかと思いますが、もう1回、簡単に説明していきたいと思います。字のところはあまり詳しく読まないでおきます。

17世紀の後半の東蝦夷地については、先ほどラッコの話をしました。千島列島にロシア人が次々に来た最大の理由はラッコなんです。1774年、飛騨屋久兵衛、飛騨屋は屋号で、武川というのが本来の名前ですが、もともと材木商でしたが、アッケシ、クナシリ場所を請け負うようになります。それは松前藩が飛騨屋からの借金を返せなかったからです。

ここではキリタフと書いていますが、この当時はまだネモロ場所というのがなくて、根室も含めて今の霧多布から東方と考えていいでしょうね。ここやクナシリ場所などは、それまで場所請負商人の請負が設立していない地域だったのですが、飛騨屋が請け負うようになりました。ところが、クナシリ島にはツキノエという有力アイヌがいて、なかなか思うように交易が進まなかったという状況が17世紀後半の時期です。

そうこうしているときに1778年、(シベリアの有力商人である)シャバリンが、根室半島のノッカマップに、やはり交易を求めて渡来してきました。翌年には、アッケシまで来ています。これがその様子を描いたものです。これは今のドイツのゲッティンゲン大学のアッシュ文庫というところに残されているんです。最近カラーでこういうものが見られるようになりました。実はアッケシにシャバリンたちが来たときの絵は、もう1枚、描かれていたらしく、それは日本側に渡されたというのですが、今のところ見つかっておりません。どこに行ったのか分かりません。



この絵を見ると、これは日本の船、この辺にある皮でできているような船がロシアの船で、実はこのアッケシにロシア人たちが最初に着いて、もうここへ整列して待っているんです。そこに日本の船が着いて、松前から来るわけですね。こういう荷物を持ってきているという絵です。これも前から白黒の写真はいろいろなものに出ていたんですけども、カラーの写真が、今、見られるようになっています。

そのころ幕府の政策を簡単に説明しておきますと、先ほど言いましたように幕府が田沼のときに蝦夷地を調査することになった直接のきっかけは、工藤平助の『赤蝦夷風説考』です。田沼は蝦夷地の経済的な価値に目を留めて、それで調査をして、そのときに最上徳内が後日の調査結果も踏まえて『蝦夷草紙』などを書くわけです。ところが田沼が失脚しますので、結局は調査が中止のような形になってしまいます。

その直後にこのクナシリ・メナシの戦いというのが起こるわけです。メナシというのは、今の根室管内と考えてください。東というニュアンスのアイヌ語です。クナシリ島はここです。そこでアイヌの人たちが、先ほど言った飛騨屋の人たちを次々に襲撃するということが起こったんです。その原因は、それまでは交易していたのを現地のアイヌの人を使ってメ粕、つまり、サケやマスから肥料を作るわけです。ニシンなんかは道南の方でも取れて、そういうことをやっていたけど、サケやマスから、メ粕を作るということは、それぐらい大量に取れる地域であるということですね。そうした方がもうけが大きいと。

先ほど説明しましたように、クナシリ島では最初は現地のアイヌの妨害に遭って、なかなか交易できなかったということで、結構赤字がかさんでいたとか、いろいろな原因があるんです。けれども、かなり一般的ではない状況でアイヌの人たちを使ったということで、それが蜂起につながるわけです。

直接の原因としましてはクナシリ島の惣乙名が病気になったことだと松前藩の討伐隊の新井田孫三郎の記録などにはあります。惣乙名や乙名というのは、本州の方では庄屋とか名主に当たるんだというふうに書いているものが結構ありますけれども、いろいろ議論されてます。例えば庄屋や名主の上に位置する、この辺が首長に当たるのかどうかということです。少なくとも乙名の上に当たるのがこの惣乙名ですが、(そうした地位的な解釈には諸説があつて)よく分からないんです。

きっかけに話を戻すと、まずその惣乙名が飛騨屋の支配人からもらったお酒を飲んで死んでしまったか、現地に1人だけいた松前藩の下級役人、竹田勘平という者が、サンキチという病気になったアイヌに薬としてお酒を飲ませたところ、これも亡くなってしまったとあつて、どちらから真実か不明です。ま



あ、ほかにもいろいろなことがあったんですけども、（和人たちは）日ごろから「働かないと毒殺する」というようなことを言って働かせていたので、これは毒殺されたに違いないということになったわけですね。それが蜂起につながると。

その蜂起した場所が、最初はクナシリ島です。具体的な被害者の数ですが、飛騨屋の人たちと、ここに大通丸という船もいて、そこも次々に襲撃されたわけですね。実際に何人ぐらいの人が蜂起に加わったかという、これは後の取り調べで分かるわけですけども、（先のクナシリの他）メナシ地方では89人のアイヌの人たちが49人を殺害したといえます。それを全部合わせると、このクナシリとメナシを合わせると130人のアイヌの人たちが71人の飛騨屋の人たち（うち松前藩の侍1人）を、次々に殺害していったと。

次は鎮圧の過程です。松前藩は鎮圧隊、新井田孫三郎を隊長に、260名ほどの、松前藩の侍がほとんど来るような状況だったわけですけども、途中でいろいろ情報を仕入れながら根室まで2カ月ぐらいかけて移動するんです。この年はうるう年で、潤6月があり、6月、潤6月、そして7月に現地に着く。そして、取り調べをすることになる。ただ、こういう状況ですので、松前藩で取り調べをしても直接なかまうまくいかないということは分かっていました。そこで、先ほど言いましたけれども、現地のいわゆる乙名身分のションコ、ツキノエ、イコトイという人を通じて、誰が何をやったか、直接殺害に加わったのは誰かということを取り調べて、現地に牢屋を造って、その直接の加害者37人を処刑したと。現地のノッカマップというところで、首をはねて胴体は現地に埋めて、首は塩漬けにして持ち帰って松前でさらし首のようにしたと記録されています。

クナシリ・メナシの関連史料について

この2枚の絵はもう皆さん、あちこちでご覧になっていると思います。これは函館市中央図書館では夷酋列像と言っておりませんで、「御味方蝦夷之図」というタイトルが付いております。先ほどから名前が出てきているように、左の方はアッケシのイコトイ、右の方はノッカマップのションコ。この人たちは何で描かれたかという、松前側に協力したのでこういう絵が描かれたと言われています。けれども、これが写実的でないということも研究されております。





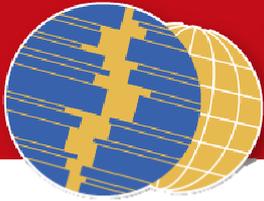
これには12人描かれています。函館にはこの2枚があって、もう1つ、原本と思われるのはフランスのブザンソンに11枚あります。

着ているものはいわゆる蝦夷錦ですね。日本風の着物仕立てみたいですがけれども、中国から渡って、おそらく樺太経由で入ってきているものです。こういう形になっていたかどうか非常に疑問なんですけど。それと、この靴は、木なのか皮なのか、こんなものも日本のものではなさそうだと。持っているのは、これはアイヌの人たちが宝物にしていた鍬先とかという、もともとはかぶとの上に付いていたもので、アイヌ向けにこういうものが宝物として蝦夷地へ入ってきたようです。



これはクナシリ島のツキノエで、この人もいすに座って、赤い蝦夷錦を着ていて、黒いのはどうもロシア風のマントではないでしょうか。それにブーツみたいなものを履いていると。これが先ほども函館にあったノッカマップのジョンコという人です。これも蝦夷錦ですね。竜のつめが5本ぐらいありますか。アッケシのイコトイです。この人も赤いマントのようなものを着ていると。中はやはり蝦夷錦ですね。

これはアッケシのシモチはイコトイの弟だったでしょうか。これはアッケシのバラサン。これが最近ちょっと話題になりましたけど熊、白いのも熊だということで、現在もクナシリ島にいるらしいですがけれども、こういうものも資料の1つになったようです。ノッカマップのノチクサとか、これは犬ですがけれども、別海のこういうアッケシのニシコマッケ。次の人はただ1人、女性です。イコトイの母。先ほどイコトイ、ヤリを持っていた人ですがけれども、その母。この人もクナシリ・メナシの戦いの際には松前側に協力したということで、こういうふうに記載しているわけです。これがブザンソンにある11枚なんですけど、もう1枚、足りないのは、これ、札幌の北尾家本といって写本に当たるわけなんですけど、非常にきれいな写本で、原本は松前藩の蠣崎波響という人が描いたんですけど、これはそれをまた弟子が写したものです。これは12枚あるんですけど、足りない部分を1枚だけ補いました。



これは根室の納沙布岬にある石碑です。これは墓碑ですけれども、横死 71 人の墓と書いてあって、文化 9 年に建てられています。文化 9 年というのは 1812 年で 23 回忌ぐらいですね。裏にはこういう文字が書いてあって、寛政元年の夏にこの地の凶悪なアイヌが集まって、侍とか士庶、庶民を 71 人殺した、名前や記録は官舎にある、ここに合わせて葬ると書かれています。

実はこれは元から納沙布岬に建っていたのではなく、明治 45 年に近くの浜で偶然見つかったものなんです。これがもともとどこかに建っていたのか、あるいはどこか運ぶ途中で船でも難破して海岸にあったのかは、記録をいろいろ探しているんですけど、よく分かりません。やはりクナシリ島が見える納沙布岬に置くのがいいだろうということになりました。現在は根室市の文化財になっており、誰でもすぐ納沙布岬へ行くという状態で見られるようになっています。

ただおもてはわりとはっきり、くっきり彫られているんですけど、裏はなかなか光の加減で見づらい場合があります。私も何十年もいて、しょっちゅう行って、一番いい写真がこれなんです。はっきり字が読める、ちょうど光の加減がいいときだったんですね。光が直接真っすぐ当たると全然凸凹が見えなくて分からないんですね。こういうものが現地に現存しているということです。



実際はこの戦いは5月ごろ起こったのですが、今は9月に供養祭をやっています。やっぱりこれも30年近く前から、アイヌの人たちが集まって、アイヌ側の人々が処刑された場所で行っています。先ほどの横死71人の墓というのは和人側の墓なんです。彼らの遺骨はありませんが、アイヌの人たちがこういう形で供養しているわけです。

それで、最後にこの戦いをどう評価するかということです。1つはアイヌ民族最後の武力の戦い、それからもうちょっと後かもしれないけど、だいたいこのころから（アイヌを）国家の内側に位置付けるようになる。具体的には、先ほど言ったように、寛政11年ぐらいに幕府直轄となる要因というのが、一つですね。やっぱりいろいろ調べてみて、反乱の原因は何かというと、やはり場所請負の収奪だという結論に至るわけですが、京都大学の岩崎奈緒子さんという人が、『日本近世のアイヌ社会』という中で、そうじゃないんだと言い出して話題になりました。

「過酷なアイヌの人たちを原因とするものではなく、クナシリの最有力者サンキチの死に対する親族を核とする報復行動に、和人による償い要求の無視という要素が絡まった事件であり、アイヌと和人の双方から規定された関係秩序が歪められようとしたときに起こった、いわば文化摩擦であった」という結論を、岩崎さんは出しているわけです。けれども、私はやっぱりそういう立場は取らない。いろいろ史料を見る限り、そういう面もないとは言いませんが、これが真の理由だというふうにはやっぱりとらえられないと思います。やはり私は場所請負の収奪ということを再確認したということになるのかと思います。

【ラクスマン来航と大黒屋光太夫】

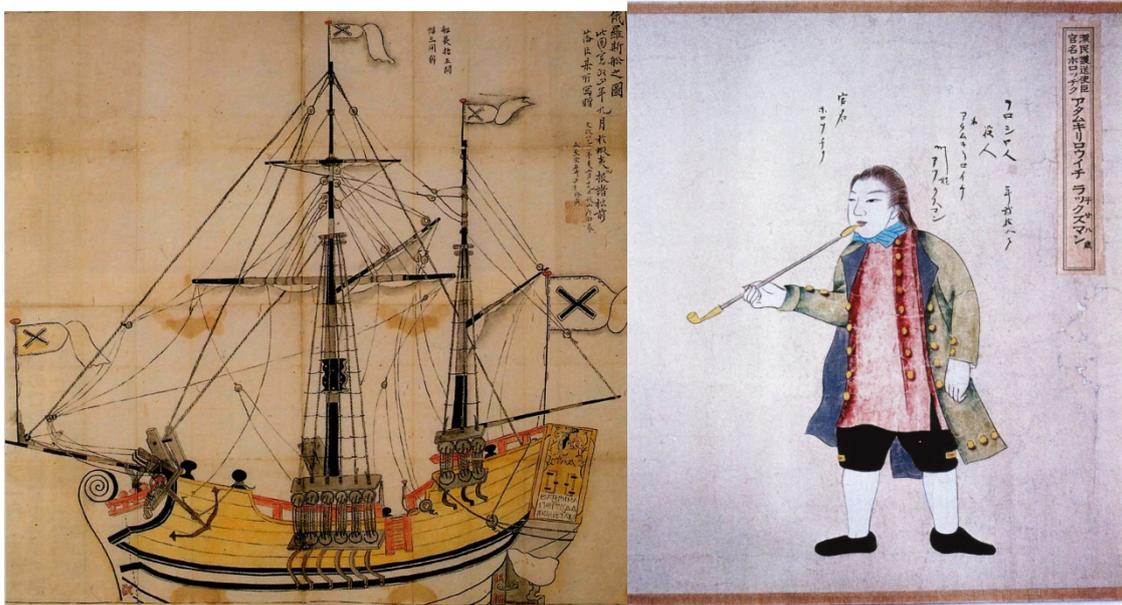
もう1つの話は、クナシリ・メナシの3年後に起こるラクスマン来航です。クナシリ・メナシの戦いのときも、幕府側が一番心配したのは、ロシア人のことです。彼らはすでに千島列島に来ていますから、ロシア人の指示によってアイヌの人たちが蜂起した、戦ったのではないかと非常に心配していたんですね。けれども、そうではないということが分かった3年後に、今度は当時のエカテリーナ2世の指示に基づいて、国の使節として日本に正式に通交交渉を求めてきたというのがラクスマンなんです。



先ほども言いましたけど、彼らは最初、別海町の方に着きまして、漂流民の大黒屋光太夫が10年ぶりに帰ってきたと。帰ってきたといっても、まだ当時ここが日本かどうかという認識としては、田沼の後に老中になった松平定信はあそこは日本ではないから外国人が来てもいいんだと書いているんですね。だからまだそのときは日本の領域内という感覚は幕府側にはなかったと思います。

ここに上陸して、結局、根室に上陸して8カ月間、翌年の5月まで家を造って滞在すると。目的はやはり第一は通好、通商関係樹立です。何も国交がない国ですから、漂流民を送り、送還するというのを名目にして、なかなかこの本当の目的は言わないんですね。でも根室で松前藩の人間も来ますし、松前にたまたまいた幕府の役人も根室に急行しますので、そういう中でいろいろ話を聞くと、やっぱり通交、通商関係を求めてきた。それは日本側でも分かっていたんですけど、ラクスマンはなかなか直接には言わないんです。最後に松前で幕府の正式な使節との会談で、初めてそのことを明らかにするんですね。

あとはいろいろな調査、すなわち天文学、地理学、植物、港湾などの調査でした。これは根室市郷土資料館にある資料です。これは購入したもので、そのラクスマンたちが乗ってきた船の絵図です。これと非常に似た絵が早稲田大学の図書館にも1枚あります。よく見ると少し違う。何が違うかという、このロープの本数がこっちがちょっと多かったり、色がもう1色、早稲田の方がちょっと緑色を使っていたりして違うんですけど、あとはほぼ同じです。



これはまさに見て描いた船ですけれども、ほかにもいろいろな絵図があるんです。たとえば、底まで見えるような絵図もありますけど、それは直接見て描いた絵ではないのではないかな。これがおそらく直接見た絵図で、これを模写して当時に描いたものもあるわけなんです。文政8年というふうに、ここに書いてありますけれど（私の本ではそういうことを指摘しました）。ラクスマン一行は、これに42人ぐらい乗ってきているんですね。ラクスマンの像も何種類かあるんですけども、なぜか日本風のキセルを吸っているのがあって、たばこが好きだったのかなと思いますね。



飛騨屋はクナシリ・メナシの戦いの後、結局は場所請負を罷免されて蝦夷地と直接かかわらなくなっていたはずなのに、なぜかそれ以降の史料をいくつか所蔵しておりました。私も非常に気にしているんですけど、なぜあるのかよく分かりません。その中の一枚に、ラクスマンたちを描いた絵図が残されています。一番前にいるのがラクスマンです。



これもよく使われている絵ですね。これは松平定信が持っていた史料で、現在は天理大学の図書館にあるのですが、根室にラクスマンたちが滞在しているときの絵です。これは結氷している根室港。今は危ないからここをこんなふうにして歩いたり、なかなかできないですけど。場所は根室港の前にある弁天島という島で、そこにエカテリーナ号を停泊させて、櫓でロシア人が荷物を運んでいる場面です。



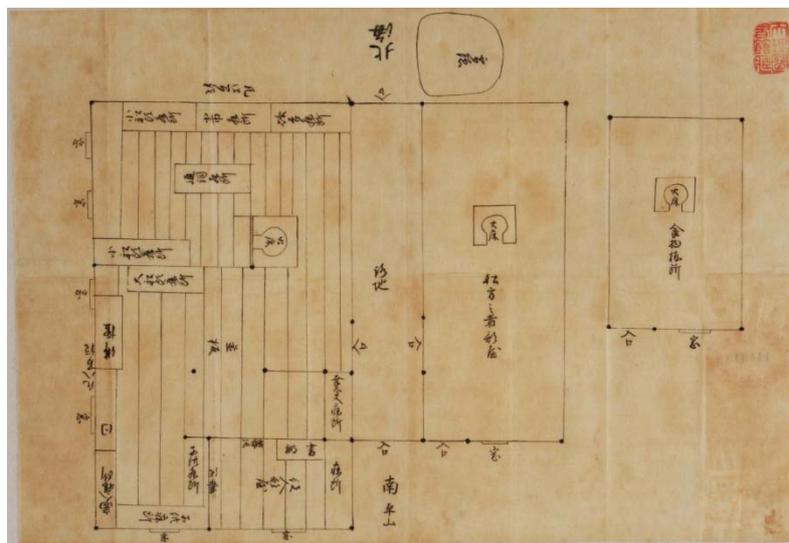
この図の中に「ワロシヤ小屋」と書いてありますが、つまり一冬過ごすための越冬小屋です。こちらの方は運上屋と書いてありまして、よく見ると日本人風の着物を着た人がいる。こういうところにもアイヌ風の人たちがいるんですね。根室に行った方はご存じかと思いますが、根室半島には実はあんまり木がないんですね。図中にも半島に行く途中、納沙布に行く途中に「このあたり、皆、カシワ、ナラの木立」というふうに書いてありますが（半島部にはないんです）。

カシワというよりもミズナラなど、いろいろなものが混じり合っているようですが、ミズナラもこんなふうな風を受けて曲がったような状態で、今でもあります。冬は枯れていますから余計こういうような感じです。だからこれは当時、ちゃんと見た写実的な絵なんだということが分かります。あんまり雪はない。ちょっと白っぽく見えるんですけども、今でも雪は非常に少ないところです。





これは別の絵図で、（前の絵図を）拡大して反対から見たような絵もあるんですね。これ（図中の動物）はヤギなんですけど、日本人はヤギがよく分からなくて、「（ロシア人が）犬みたいな動物を連れてきた」なんて書いているんです。小屋の部分をよく見ると窓があって、彼らはガラスを持ってきているんです。幕末にこの辺に来たいわゆる探検家というか、そういう人たちがこの辺にガラスの破片が落ちているのを見て、これはラクスマンが来たときに造った家の割れたものだというのを記録したのものもあります。

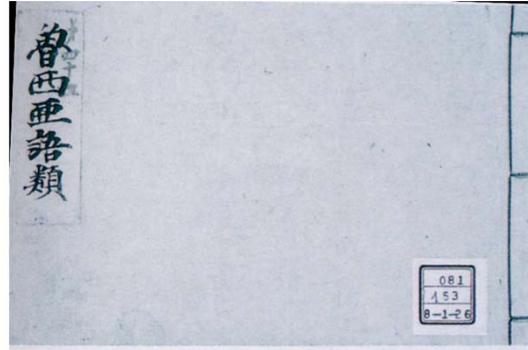


この小屋の間取り図ですが、この辺はトイレがあったり、ここは食べ物をこしらえる場所とか、こういうところにベッド状のものがあって、それぞれの誰がいたところとか、この辺に炉みたいなものがあったとか、縦に板が張ってあったというのが分かるんです。ベッド状のところ、これはラクスマンで、またここでもキセルを吸っています。これは全部、松平定信が持っていた史料です。



これが私も何年かかけて、やっと入手した地図ですけれども、ラクスマンが来たときに根室港を測量して、もう1枚、アッケシ港も同じような絵があるんです。先ほどの弁天島、それから根室港、ここにいろいろ書いて、こちらはロシアの家だと、こっちは日本の家だと。この辺がどうもアイヌの家だというふうに書いていますね。水深も書いてあって、実際はもう少し小さいんです、この島は。でもこんな岩礁も3つぐらいあって、今はここに防波堤ができています。正確な測量図とは言えません。今のこの辺は埋め立てになっていて、埋め立て前の地形と重なるんです。この絵図はロシアに残されています。

日本人とロシア人は、根室の滞在時に、いろいろ地図を写し合っているんです。日本の地図もこの当時はわりと簡単に見せていたようです。シーボルト事件のときに地図がいろいろ問題になりましたけど、このときは問題にならなくて、またロシア側の地図も見せてもらって、船にも乗って、それを後で書き写したんですね。こういう道具、船に載っていたこれは十字架みたいなものとか、香炉と書いていますけれども、これもロシア正教のマークですね、そういうものも日本人がいろいろ記録している。これはやはり天理大学にあるんですけれども、『魯西亜語類』という、日本で最初のロシア語辞典だと思われる。

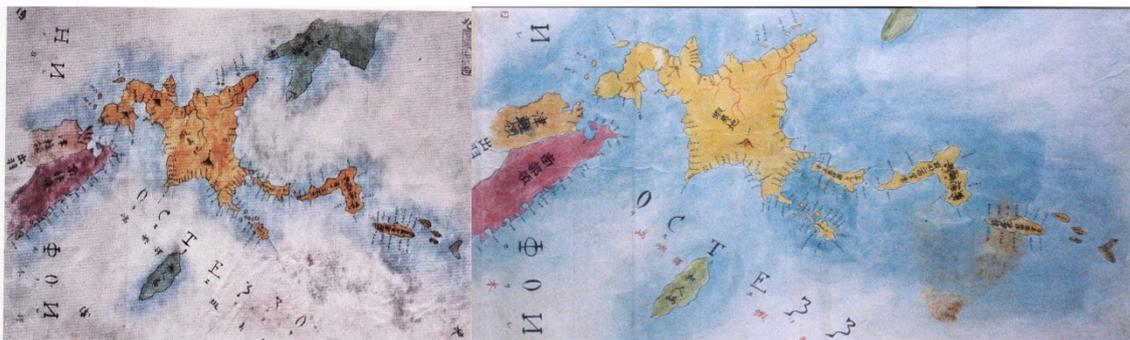


ネムロで作成された日本最初のロシア語辞典(天理大学図書館蔵)

これは余談ですが、根室でラクスマンらしい人が、具体的にはロシア人としか書いていませんが、こういうスケートをこれは「エギライドロバス」という名前で、別名を「コーニキー」と書いているんです。これを根室港で滑っていて、これは日本で一番初めのスケートじゃないかというふうには私は言っているわけなんです。これは刈谷藩の学者の家にあった史料なんです。



この地図は上部があまりきれいじゃないですけど、似たようなものがあります。ほとんど同じ地図なんですけれども、これがやっぱり飛騨屋にあった地図なんです。よくよく見たらロシア語が書いてあります。それも日本語読みなんです。これ、ニホンか書いてあるんです。これをちょっと見えにくいですが、ここに片仮名もちゃんと「ヲステエソソヲ」と書いてあるのです。





これは誰かが直接に聞き書きして、その発音まで書いているのでしょう。だから、おそらくラクスマン来航のときに、オリジナルができたと思われます。なぜ、蝦夷地から引き払ったはずの武川家、つまり飛騨屋にあったかというのは分かりません。また場所請負をやろうとして情報を収集していたのかなというふうには考えられますけど、はっきりしたことは分かりませんね。

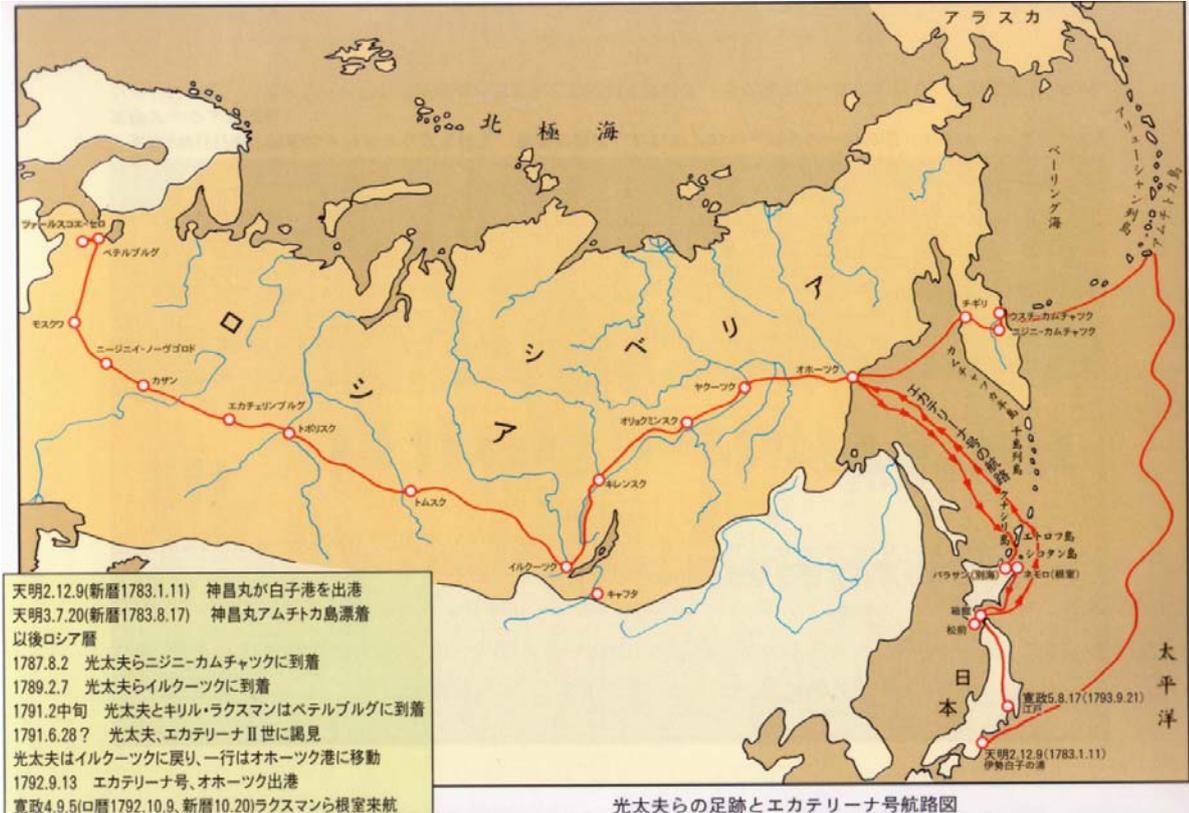


他にもいろいろな地図があるんですね。不思議なのは、ここに無人島と書いてあるんですよ。後でウルップ島の横にラッコ島と書かれる地図が結構出て来ます。ウルップ島とラッコ島というのが混同されたり一緒になったりするんですけど、ここに同じように書かれている地図はあまりないですね。これは非常に面白い地図だと思います。

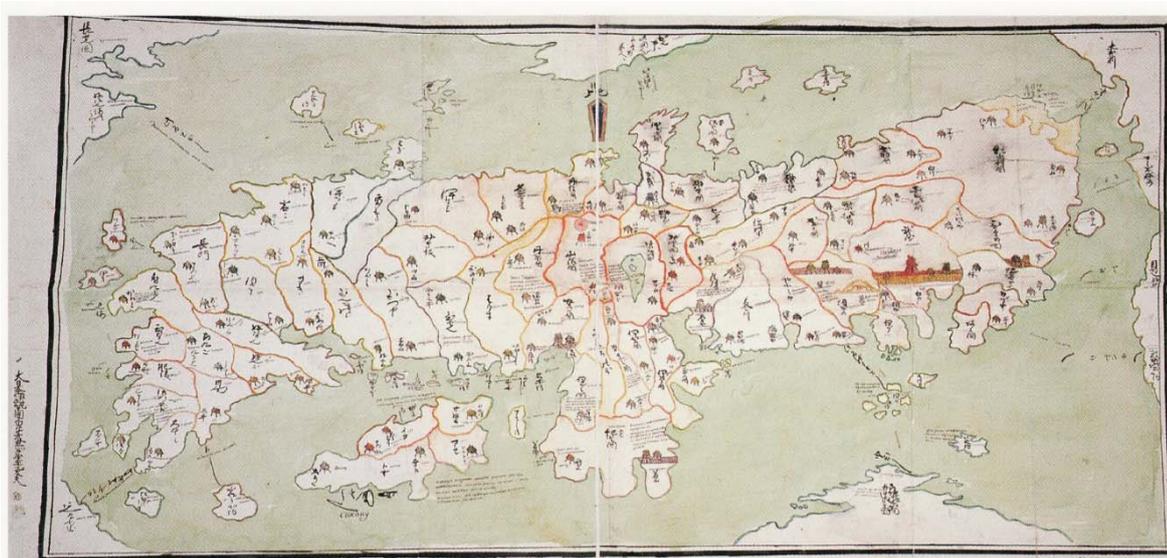
光太夫とラクスマンの時には、このように行ったり来たりしていたことが重要だと思います。大黒屋光太夫は天明2年に漂流して、アリューシャン列島のアムチトカ島に着いたんですけども、そこからヤクーツク、イルクーツクを経由して、首都ペテルブルグまで行ってエカテリーナ2世に会って日本へ帰国する許可をもらう、オホーツクまで戻ってきて、ここからエカテリーナ号で根室まで来たわけです。ロシア側の思惑として、日本と通商交渉をやりたいということがあったからこそ、ラクスマンたちと一緒にここに来て、最終的には蝦夷に戻ったと。この話は井上靖原作の小説『おろしや国酔夢譚』でも有

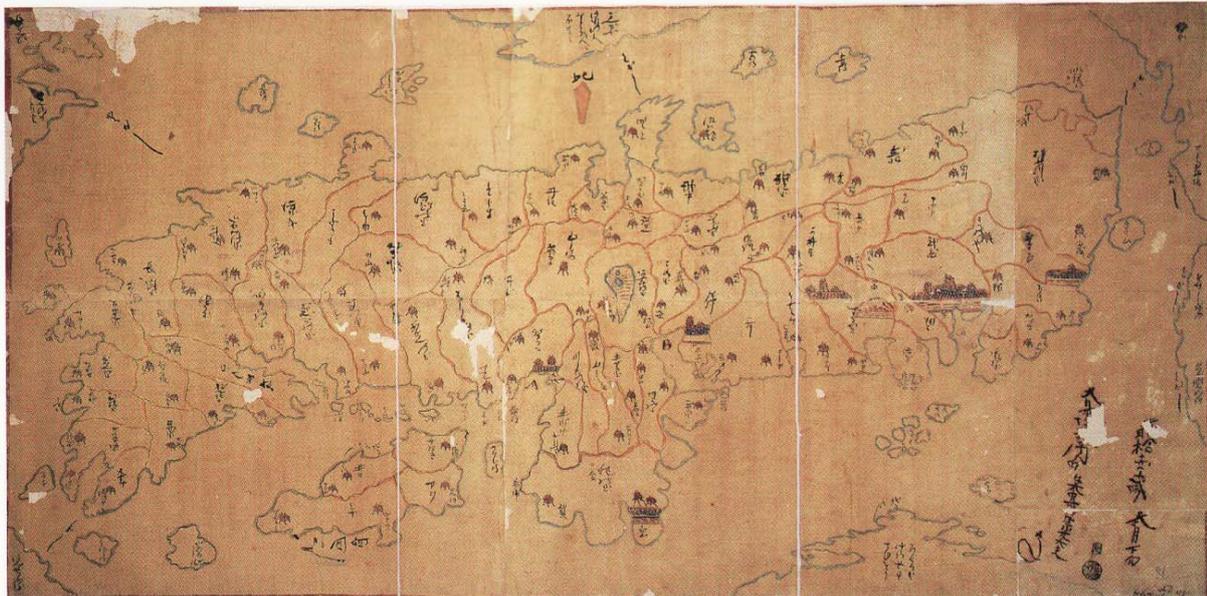


名で、映画にもなっていますね。光太夫を演じたのはもう亡くなった緒形拳とか、他にもいろいろな俳優さん出ていました。



この光太夫が描いた日本図が先ほどのゲッティンゲン大学にあるというのは分かっている、いろいろ紹介されていたんですけども、ロシアにも2枚、これは北海道新聞社の相原さんと、あとサハリンの博物館のシュービンさんあたりがいろいろ探してくれて、シュービンさんが直接、現地に行って写真を提供してくれたものです。





上部の地図はちょっと見づらいかもしれませんが、日本語とロシア語の書き込みがあります。下は日本語だけです。これはいまだに結構議論されているところですが、九州がなぜかつながっているんですね。蝦夷地なんて、ここに松前と書いてありますし、光太夫もよく知らなかったということですね。

さらにまた、エストニアからこんなものが出てきたんですね。なぜエストニアかというと、この後レザノフ使節が長崎にきた時の船長、クルーゼンシュテルンの出身地なんです。そのクルーゼンシュテルンの周航記には、地図を船に載せていたようなので、光太夫の地図を1枚持って日本に来たんじゃないか考えられています。また、光太夫のハンコが押してあったり、自筆の署名が書いてあったり、これもおそらく光太夫の字だと思われまうけど、ロシア語でいろいろ書いてある。



これは日本に帰ってきた漂流民の図です。実は3人いたんですが、小市という人は根室で亡くなっちゃった。彼の遺品が奥さんに返されて、現在でも出身地の鈴鹿市に残されて、このように展示されている。



ます。面白いことに、江戸時代でも、こうした遺品を展示して、お金を取っていたんですね。持ち帰ったいろいろな着物とかも含めて、この人がガイド役。で、ここに説明書きがすごく細かくいっぱい書いてあるんですけども、こういう遺品を展示して、そして後家になった奥さんにそのお金を渡したのだと、書かれています。何ページにもわたってそういう説明があるんですけど、これはその1ページです。



名古屋での小市遺品展図(紙の博物館蔵)

この図は根室で一冬過ごしたときに、エカテリーナ号乗組員のセミヨン・マホーチンという人が根室で亡くなっているんです。先ほどの小市という人も亡くなっていますし、松前藩から来た鈴木熊蔵という人も死んでいます。そのときにこのロシア人のお墓が作られて、船長のロフツォフが墓碑銘を刻んだというんですけどね。木目ばかりが見えますけれども、これは拓本です。現在、早稲田大学に残されています。もちろん現物はありません。





これは光太夫と磯吉の図です。これと同じような構図の絵はたくさんあります。それぞれ北大図書館、国立公文書館内閣文庫にあります。ですが、着ているものが全然違うのはなぜだろうと思いますね。着せ替えしたのでしょうか。ほかにも同様な絵があるんですけど、みんな違うんですね。でも構図はほぼ同じなんです。もう1人の帰還者の磯吉さんは、どの絵を見ても正面を向いてくれないんです。だから顔はよく分からない。



この図も教科書なんかに出ていて有名ですけど、大槻玄沢が蘭学者たちを招いて、西洋のお正月のお祝いをしたものです。どうも名前を書いてないんですけど、これが光太夫で、これが磯吉じゃないかといわれています。どれが誰かは説明がないです。これを拡大すると、ロシア語が書いてあります、キリル文字が。これ、ダイコウと読めるのですね。これは1月ですかね。この人は光太夫に違いないと、こういうものが書けるのは当時この人しかいなかったと。こういう色紙みたいなものとか、扇子とか、光太夫がいろいろな人に求めに応じた描いたものが、全部で20枚ぐらい現存しているのかな。





これは光太夫が漂流中に、死んだと思って家族が建てたお墓です。現在もあります。光太夫は後で鈴鹿に里帰りしますので、自分のお墓を見たんじゃないかと思います。



これは根室にあるラクスマン来航記念碑です。これは根室出身の芸術家(武蔵野美大教授)池田良二さんが作ったんですけども、エカテリーナ号の先端をモチーフにしてデザインしたらしいんです。これは市役所の隣の公園にこういうものが今でもずっと建っています。

ラクスマン来航記念碑「歴史の然」



そろそろ終わりが近づいてきましたが、ラクスマン来航の意義はどうだったかということですね。先ほど言いましたけれども、8カ月間、根室で滞在していて、実際に松前に行ったのは10日間ぐらいしかありません。けれども、そこで幕府の使節である宣諭使2人と正式に会談して、幕府は国法書を手渡し



た。実は最近の研究では、鎖国という国法はないんです。鎖国が国法だったかのように思われていますけど、どうもこの辺で松平定信が作ったのではないかというふうになっております。そういうものを示して帰させようとしたようです。

結局は松前ではそういう通好交渉をする場所でないので、長崎がその場所だと幕府は主張します。長崎に行く通行許可証のような信牌（シンパイ）を第3回目の会談のときに渡したと。2回目のときには、やっと光太夫たちが日本側に引き渡されています。これまでずっとロシア人と一緒に過ごしていて、先ほどの根室の家でもロシア側にずっといたわけですね。6月21日に第1回の会談があって、27日に第3回の会談。それで6月30日に松前を出発して、7月16日に箱館。（距離がない割には）ずいぶん時間がかかっていますね。そしてラクスマン一行は長崎には行かないで、またオホーツクの方に戻ったんですね。これで最初の邂逅は終わりました。

まとめ

もうだいぶ時間がきてしまったので、話をまとめます。

まず先ほども申しましたが、クナシリ・メナシの戦いの原因はやはりアイヌ収奪だと。それはやはり実態であって表象とは言いがたい。先ほどの岩崎さんは表象という言葉を使っているわけですが、やっぱりそうではないんだと。実態としてそうだとすることは、今まで使われている史料も含めて再検討してきたわけです。

この事件のあと、寛政11年（1799年）に東蝦夷地を幕府が直轄するようになりました。初めは仮上知といって仮に直轄地にしたんですけれども、その後、永上知ということで永久直轄にしています。やはりこのころから蝦夷地は、だんだんと日本の支配が及ぶ地域になっていったと考えていいです。

その後、本にも書いたのですが、近藤重蔵なんかがこの直轄の前、直轄後も含めて、エトロフ島の経営に当たるんです。彼らが何のためにエトロフ島を経営したかという点と完全にロシア対策ですね。そしてその対策の主眼は、アイヌを和人化することであると。それまでアイヌはアイヌ風に生きて、松前藩は日本人化するような政策は一切、採ってなかったんですけれども、近藤重蔵の政策によって名前を日本風に改めたり、風俗も日本風に改めたりしています。そうすることでロシア化しないように、日本人化させるわけです。

近藤重蔵も率直に書いていますけれども、広い蝦夷地で、軍事力だけではそんなにすぐに（対抗）準備ができないと、むしろアイヌ人を日本人化することによってロシア化を防ぐ、そういう地域にしていくべきだと。それで結局、領土化したと。本来であれば千島列島全域が日本の領域だというふうに考えたんですけれども、そこまではなかなか手が回らないと。エトロフ島で（境界を引いて）、ウルップあたりは緩衝地帯という位置付けです。

その後ゴロヴニン事件が起こり、ゴロヴニン奪回交渉の時に、ロシア側はその領土関係のことを持ちだしたら、ゴロヴニンは帰してもらえぬかどうか分からないということで、結局はそのときはあいまいにしたんです。日本側はさきほどの近藤重蔵の見解に近い答えを用意していました。つまり、ウルップ島は緩衝地帯というどっちも行ったり来たりしないんだということです。日本はエトロフ島から南。ロシアはウルップ島の向こうの島からロシアだという、そういう位置付けですね。ですから今、言っている北方四島とウルップ島の位置付けが少し違っているかなというふうに思いますけれども、幕府が一番



初めに考えたのはそういうことです。それが後でウルップとエトロフの間というふうに変わってくるわけです。

ロシアが意識にのぼる以前、つまり田沼のころはどちらかというと経済的な政策、幕府財政建て直しということに重点を置いて蝦夷地対策を考えたと思われるんです。けれども、その後、そういう経済的な面よりもむしろ、対ロシア政策として奥蝦夷地をどうするかというふうにも幕府側の考えが変更してきています。この時も幕府は一枚岩ではありません。

老中も何人かおられますし、その下にいろいろ奉行なんかもあります。蝦夷地を積極的にどうにかしようという考えの幕閣、それからあまりそっちの方にはお金を投じるべきではないという消極的な幕閣、いろいろいたわけですが。けれども、少なくともラクスマンが来たころには松平定信の記録を読む限りは、どうしても無理やり日本と通好交渉を求めてくるようであれば、通商も仕方がないと考えていたようです。しかし、レザノフ来航のころになると、変わってしまって、オランダ以外の国とは交易しないんだとなっていたわけですが。

ただ、近年の研究にもありますが、鎖国は江戸時代の初めからだというふうにいわれていますけれども、本当はレザノフが来たときに初めてオランダ以外の国、ヨーロッパの国とは通好、通商関係を結ばないということを表明しているんですね。このラクスマンのときもそれに近いことは言っているんですけれども、まだ完全ではなかった。やはり幕府の考え方が、ラクスマンのときとその後のレザノフのときではだいぶ変化があったようです。

もちろん、こうした幕府側の視点も考慮に入れてはおりますけれども、それを奥蝦夷地から見たらどうなるんだというのが私の研究です。そこでアイヌの人たちもどようになっていたかも含めて、結果的には奥蝦夷地が幕藩制国家に組み入れていく過程、道筋を考えています。さらに「つくられた国境」、これは仙台在住の菊池勇夫さんがそういう本を書いていますけれども、まさにそういうつくられた国境が創出されていく過程であったというのが、私の結論なんです。以上で、後はご質問ということにいたします。

質疑応答

(司会) どうも、ありがとうございます。お時間もありますので、早速、質疑応答に入りたいと思います。ご質問なり、コメントなり、ある方は、まず挙手をお願いいたします。

(兔内) スラブ研究センターの兔内と申します。大変興味深い話、ありがとうございます。いろいろ見た図もありましたけれども、新しくというか、私が知らない図もありました。ちょっと今日の話とうまく合うかどうか分からないんですけれども、国泰寺が最初に年表か何かに出てきまして、3つのお寺を幕府が造ったと。考えてみると3つの場所がその有珠と類似とアッケシで。全部、東蝦夷地ということになっていますけど、西蝦夷地側にはなかったのかなとちょっと思って、その東と西の違いみたいなものってあるのかなと。

それともう1つ、言いますと、私も根室に2~3回、もうちょっとかな4~5回行ったことがあるんですけど、結構、早い時代から北海道の中では開拓されてきたというんですね。それは漁業とかいろいろな面もあると思うんですけど、それと宗谷とかオホーツク側とやっぱりかなり発展の仕方が違



ったような気がして、特に根室は早いなと思ったんですけど、その意味というか、ロシア対策が大きかったということなのかもしれませんが、そのあたりをちょっとお話ししていただけたらと思います。

(川上) 幕府は実は最初、官寺を5つ造ろうとしていたんです。それも全部、やっぱり東蝦夷地なんですね。それがいろいろ財政事情とか何かで結局は3つに絞られたんです。仏教を浸透させるということが本来はあったと思うんですけども、本質的にはやはりロシアを非常に意識して、やっぱりアイヌ教化、先ほど近藤重蔵の政策でも言いましたけれども、結果的にはそれほど浸透しなかったという結果にはなってはいますが。

後で西蝦夷地も幕府直轄になりますけれども、西蝦夷地はまだそのころロシアとは直接関係ありませんし、樺太はどちらかという中国の影響が大きいですから、そういう意味では幕府は、やっぱり東の方を対ロシア対策としては非常に重要に考えていたというふうに思います。

もう1つの東の根室の方が開けたのが早かったんじゃないかという質問ですが、両者の違いはまず産物ですね。先ほどもサケ、マスのお話をしましたけれども、西の方と比べると非常にたくさん取れるわけです。私も今、数字は覚えていませんけれども、例えば斜里とか網走の方と、根室の方と、運上金(場所請負の商人が松前に払うお金)の額も東蝦夷地の方が格段に高かったと思います。つまり、そういう経済的な価値、生産力が非常にある場所ということで、いろいろリスクもあるんですけども、それだけ産物がたくさんあると。

あと先ほどラッコの話はちょっとだけしたのですが、実は最初は日本ではラッコの需要というのはそんなにないんです。最上徳内は長崎から中国への輸出用に獲っていると書いています。ただ、どのくらいの量が日本から中国に行っているかというのは、なかなか数字としては出てこないんです。それよりも、例えば徳川幕府ができたときに松前からラッコを家康に献上したとか、どっちかという非常に珍しいというか、需要は日本の毛皮文化というのはそんなになかったと思います。

千島列島が先ほど言ったように享和年間に幕府の政策によって往来が極度に制限されます。それはロシア人化したアイヌの人が来ないようにということと、向こうに行くとロシア人化しちゃうということです。だからもし北方からやって来たら、捕まえて厳重にいろいろな武器とか見せて、もう出てくるなということを見せしめるんです。それでも何回か来るといことはあったようですが、幕府の政策によってラッコを取りに行ったりもできなくなっちゃっているんで、その時点からはラッコはあまり日本では入らなくなっているんです。

あと、これは宗谷などでもかなり獲れますが、ワシの羽根ですね。ラッコに次いで高価なのはワシの羽根です、交易品の中では。これも場所請負商人が一応は取り扱っているんですけども、松前藩が直接扱う商品で軽物というふうにいわれているんですけども、ワシの羽根は弓の矢の羽根になって非常に高価なんです。これはだいたいオオワシ、オジロワシの尾羽なんですね。今でもちょうど流水の時季とかに、羅臼とか標津とか根室の方に大量にオオワシなんかやってきますが、そういうサケ、マス以外の高価な商品価値のあるものもこの辺にあったということで、そういう点でも開けたのが早いというか、そういうことはいえるのかなと。ただ、交易そのものは飛騨屋がそっちも請け負ったりしていますので、時期的にはそれほど変わらないんですね、最初のころはですね。



(Q1) クナシリ・メナシの戦いについて、今の時代、日本人の供養祭みたいなことがアイヌの人がしますよね。その背景は何ですか。普通だったら、ちょっと考えられないんですけどね。

(川上) 先ほどの今、ノッカマップでイチャルパという催しを、アイヌの人がアイヌ側でなくて、日本人の碑の前のところでもやったという背景は何かということですね。これは実際にやっている人に私も直接聞きましたけれども、最初はそういうことをやることにいろいろ反対意見もあったようです。ただ、やはり日本人 71 人も犠牲者だと。犠牲者ということはアイヌ側に殺されているんですけども、だからやっぱり時代が生んだ犠牲者というような、もう少し大きな目で見ているかなど。

(Q1) でもアイヌ側だってたくさん殺されているわけでしょう。

(川上) それは実際、処刑されたのは 37 人で、日本人は分かっているのは 71 人なんですよ。だから日本人の方が数からいったら、このときは大きいんです。

(Q1) それは数の問題でないし、逆に日本人をアイヌ側から見たら完全に侵略者なわけでしょう。そうしたら供養しているかといったら、しているわけじゃないでしょう。だから.....

(川上) 現在はそのアイヌの人に交じて日本人の人も一緒にやっていますけれども。

(Q2) ちょっといいですかね。もしかしたらなんですけれども、アイヌの人ってお墓を造らないですね。だからそういう処刑されたとしても、その人たちが、まあ、埋めた場所もあるんでしょうけれども、じゃあ、そこはお参りする場所なのかというと、そうになってないということ.....

(Q1) いや、私もそう思いましたよ。思いましたが、でもあれは完全に日本人のものでしょうか。だからそこまでなぜ「お人よし」できるのかなど。

(川上) まあ、人がいいというよりもやっぱり歴史をちゃんと見つめた場合、当時はこういう事件の背景があったように、和人側とアイヌ側でこういう戦いがあったということで、結局、今、考えてみるとやっぱり歴史がそうしたんだということだと彼らは考えているようです。だから両方とも犠牲者だと。本当にそれは私、彼らから直接聞きました。やっぱり最初は議論があったらしいです。それは理解し難いかもしれませんが、実際、そういうふうに言っておりましたので。

(司会) ご本の方、大変面白く拝見させていただきました。特に今日はクナシリ・メナシの戦いの話だったので、クナシリ・メナシの方で質問が 1 つあるんですけども、岩崎さんとの話の対比がありますけど、私の方もやっぱり原因の方は飛騨屋の方法にあるというのは、先生のご本を読んでよく納得できたんですけど、逆に終わるときですか、終わるときに最終的に收拾したのは松前藩じゃなくて、3 人の乙名衆であるという話になっていますよね。



そのときに思ったんですけども、アイヌと松前のパワーバランスってそんなに圧倒的に差はあったのかしらというのが、実は率直にあります。要するに乙名衆って強力じゃないですか。本当に彼らが松前を恐れていたのかというのは、ちょっと読んでいて分からない部分があったので、そこら辺でちょっと補足していただければと思うんですけど。

(川上) まさにパワーバランスですね。その時代をさかのぼると例えばシャクシャインの戦いとか、コシヤマインの戦いとかありましたけれども、かなり松前側、和人側にとっては中世の終わりぐらいもそうでしたし、例えば松前、先ほど二百何人ぐらいしかいないというふうに言いましたが、そのぐらいの数でいくら鉄砲や大砲があったとしても、まあ、万の数で例えば押し寄せるようなことがあったら、完全に力関係でいくと(確かに)松前は敗北したと思います。けれども、その後ろ盾に幕府、幕藩制国家というものがあつたということは、天明年間に幕府の直接、調査に来たりして、そういうこともアイヌ側では理解もしているわけです。万一、一時的に松前藩とか飛騨屋とか、そういうものに対して力で勝つたとしても、その後のことをちゃんと考えていたからこそ、こういう結果になったかなという。

それからもう1つはやっぱり一番疑問に思うところは、そういう長老の人たちがなぜ松前側に協力したかということ、はっきりした答えは史料上は見つけることはできないんです。けれども、私自身はその背景として、これもよく何人かの人が言っているんですけども、場所請負に使われていた人たちは実はこの乙名層ではなくて、もうちょっと下の層で労働者化したのはそういう人たちだと。じゃあ、その乙名層は何をやっていたかという、ラッコ猟なんかをやっていたり、むしろロシアとも物々交換していたりということで、直接、そういう意味では利害関係の面で言うと、当時は松前や日本側と雇用関係には直接ないということもあって、そういうこともまず1つ背景にあつたかと思います。

それでもやはり同族ですから、考えようによっては仲間を売ったような形にもなるわけです。これも私も結局はちゃんとした史料に基づいてはいないんですけども、やはり将来のアイヌ社会、その幕藩制国家ということをやちゃんと意識した上で、アイヌ社会が存続するというものを選んだ。それがこの乙名層の人たちの判断ではないかというふうには私は考えるんです。けど、まあ、これは直接的にそういうふうには史料上からは証明はできないんですけども、私の考えはそういうことです。

(司会) ありがとうございます。もう1つだけお話をさせていただきたいのは、奥蝦夷地史という地理概念の話です。先ほどもちょっとお話があつて、先生は千島の通史を書きたいというご意向をお持ちですね。その千島の地域史を書くというときに、やっぱり奥蝦夷地史という日本史からの見方だと、名称が適切ではないんじゃないかと思うんです。つまり、蝦夷地のさらに奥というのは、あくまでも日本の和人から見た地理概念ですよね。そうじゃなくて、通史として千島を見たときには、もうちょっとそれにふさわしい地理概念があるんじゃないかと思うんですが、それに関して先生、何かアイデアをお持ちじゃないかと思うんですが、何か適切な地理概念というか、地域名称のようなものはありますか。北方世界全体を日露関係とアイヌとを展望したときに、その辺のご意見がほしいんですけど。

(川上) はっきりした形では、今、私は持っておりません。アイヌの人たちが例えば蝦夷地から千島もカムチャツカに近い方についての呼び名、チュプカとかいろいろ言い方があるわけなんですけれども、



ただ、その近い方も含めて指しているという言葉が、なかなかないんじゃないかなというふうに思います。

それともう1つは、私はやっぱり、これ、近世後期ということ为先ほど言ったように、これがはっきり言えば日本から見た時代区分なわけですし、こういう北方史をやっている人たちも、そういうことはいつも時代区分をちゃんとした上で本当は使わなきゃならないんだけど、例えばアイヌ史の中での時代区分というのははっきり言って確立されてない。どうしても日本史側からの時代区分ということになります。

例えば中世の蝦夷地なんて言った場合、道南の方は中世の範囲に入るかもしれないけれども、まさにその奥の方はほとんど日本の範囲外ですから、アイヌ史の側からの時代区分でなきゃならないと思うんですけど、そういう言い方も実はない。私は最近そういうことをちょっと考えると、適切な言い方も、時代区分としてももっとちゃんと、要するにアイヌ社会をちゃんと検討しなければ時代区分はもちろんできないわけですし。

それと同時にまた奥蝦夷地という概念はまさに同じですし、私がよって立った史料がどうしても日本側の史料ということになって、やっぱり今、指摘があったようにもっと本当はいい地域概念、当時の本当に指す地域概念が、じゃあ、アイヌの人たちがどういうふうに見ていたか、逆にロシアとしてもどういふふうに見ていたかということもあるかなと思いますけど、そういうものと総合して考えなきゃならないだろうとは思っていますけど、なかなかいい答えはありません。私自身、今は持っていません。

(岩下) 岩下です。こういう生臭い質問はしたくないので黙っていようと思ったんですが、時間がまだ少しあるので。先生は、根室でずっとお仕事をされて札幌に移られたと承知していますが、非常にこういうのを聞くと何か本当にどうしようもないんですが、北方領土は父祖伝来の土地だと言う人たちがいるんですよね。父祖伝来の土地と言われたときに日本人だとそんな昔じゃないし、もっとその島だけじゃないし、アイヌの人のことを父祖というのが、なぜ私、まったく思考が停止してそんな言い方、やめた方がいいんじゃない？ と言うとそれだけで終わっちゃうんですけど。

先生のご研究の視座から、「父祖伝来の土地」について答えたらいいものか教えていただけますか。

(川上) もう1つよくいわれているのは固有の領土というのがありますね。固有っていったいつから固有になったのとか、そうかといって日本人以外の誰も住んだことがない、もちろんアイヌの人も住んでいるわけだし、ロシアの人も一時的ですけどもエトロフなんかには住んでいるわけですよ。私が市民向けにそういう講座をやると、それは知らなかったと。今まで、まあ、アイヌの人がいたのは知っていたけれども、ロシア人が住んでいた事実なんて全然知らなかったという人が大部分です。

ですから私はやっぱり根室にいて感じたことは、領土問題があまりにも形骸化しちゃって、もうお題目みたいになってきて、父祖伝来の土地と言ったって、本当は一体いつからいるのかと。案外、考えてみると直接住んでいた元島民の人たちは、その前の親かおじいちゃんの世代かぐらいですから、それほど古い時代から住んでいたわけではないということも分かります。

あと領土問題でよくロシア側からもいろいろ投げ掛けられることだと思いますけれども、やっぱりアイヌの人の存在というものをどう考えるんだという質問ですね。やはり日本側は、そのことを話に入れると非常に話がややこしくなるというか、「アイヌも日本人」なんだけど、よくよく考えたら「いつか



ら日本人か」ということもちゃんと考えなきゃならない。けれども、そういうこともちゃんと視野に入れた上で議論しないと（いけないでしょうね）。やっぱり、そのために私は根室にいて歴史的な事実は事実としてちゃんとはっきりしないと、ロシア側からそういうふうに指摘されたとき、誰もちゃんと答えられない、避けて通るようではだめだというふうに思ったので、研究を進めていく上でそういう視点もありました。

ただ、そういうことはある意味で、ちょっと北方領土の返還運動に水を差すようなことにはならないかと、私自身も危惧していましたが、案外、誰もそういう文句は言わないですね。私も前の市長のときなんか、「いや、市長、固有の領土、固有の領土と言うけど、固有っていつからか知らないけどあんまり言わない方がいいんじゃないですか」と言ってきましたが、市長もそれに対して反論もしませんでした。ですから、やっぱりもっと領土運動を実のあるものにするためには、もう少し歴史的事実を知った上でやるのと、表面だけしか知らないでやるのでは、だいぶ違うのかなというのが私は根室にいて、それをずいぶん感じました。

この後、私がやらなきゃならないなと思っていることは、ここでも少し触れたんですけども、千島の歴史というものがずっと昔、高倉新一郎先生が『千島概史』を書いて以来、きちんと千島の歴史を書いたものはないような気がするんですね。ですので、やっぱりこれは誰もやらないならやらなきゃならないかなということで、少しずつ古いところから書いて、根室の資料館で出している紀要に今でもちょこちょこ書かせてもらっているんです。そういう歴史的事実をできる限り通史的に示すことによって、もう少し領土の返還運動も深みのあるものになるかなというふうに私は考えて、歴史をもうちょっと大事にしたい、事実関係をちゃんと明らかにしたいというようなことでずっとやってきました。

先ほど言ったように、じゃあ、領土の返還の人たちはあまり思っていない。私、よく言うんですけども、千島と言ったときに日本はクナシリ、エトロフはサンフランシスコ条約であれば入らないからということなんですけど、でも千島歯舞居住者連盟って今でもちゃんと千島だって言っているんですよ。それで運動をやっているんですよ。それについて千島という名前を引っ込めるって、まあ、誰か言った人がいるかどうか知りませんが、あまりないので、地元にいるとわりとあそこは千島だとみんな思っていると思います。

ただ、その条約で放棄した千島列島にクナシリ、エトロフは含まれないというふうに日本政府は言うんですけど、ちょっとあそこまで言っちゃうと、そこに住んでいた人との感覚にずれがあるかなというふうには思いますけどね。はたから見ているのとあそこに住んでいるのとは違って、住んでいた人たちにとって領土は故郷なわけで、そういうような位置付けで返還してほしいということは言っているかなというふうに私は感じています。

あと漁業の問題もありますので、どちらかという、そういう経済的な漁業でちゃんとできる、まあ、向こうに行って魚を取りたいとか、そういう要求の方が、故郷に戻ってくるというよりも実は地元では強いかなと（いう感があります）。それで、いろいろな昔はレボ船の問題とかいろいろな問題がやっぱり国境近くでは常に起こってくるのかなというふうには感じておりました。

ちょっと答えとはずれたかもしれませんが。

（司会） ありがとうございます。最後に川上先生に盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。



ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.10

特集「ボーダースタディーズ・セミナー2011」

編集者：藤森 信吉

発行日：2012年8月16日

発行者：岩下明裕

発行所：北海道大学スラブ研究センター内 GCOE 事務局

〒060-0809 札幌市北区北9条7丁目

Tel 011-706-4809 Fax 011-706-4952

URL <http://borderstudies.jp/>